

41685

教科書文庫

4
810
41-1933
20000
38642

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

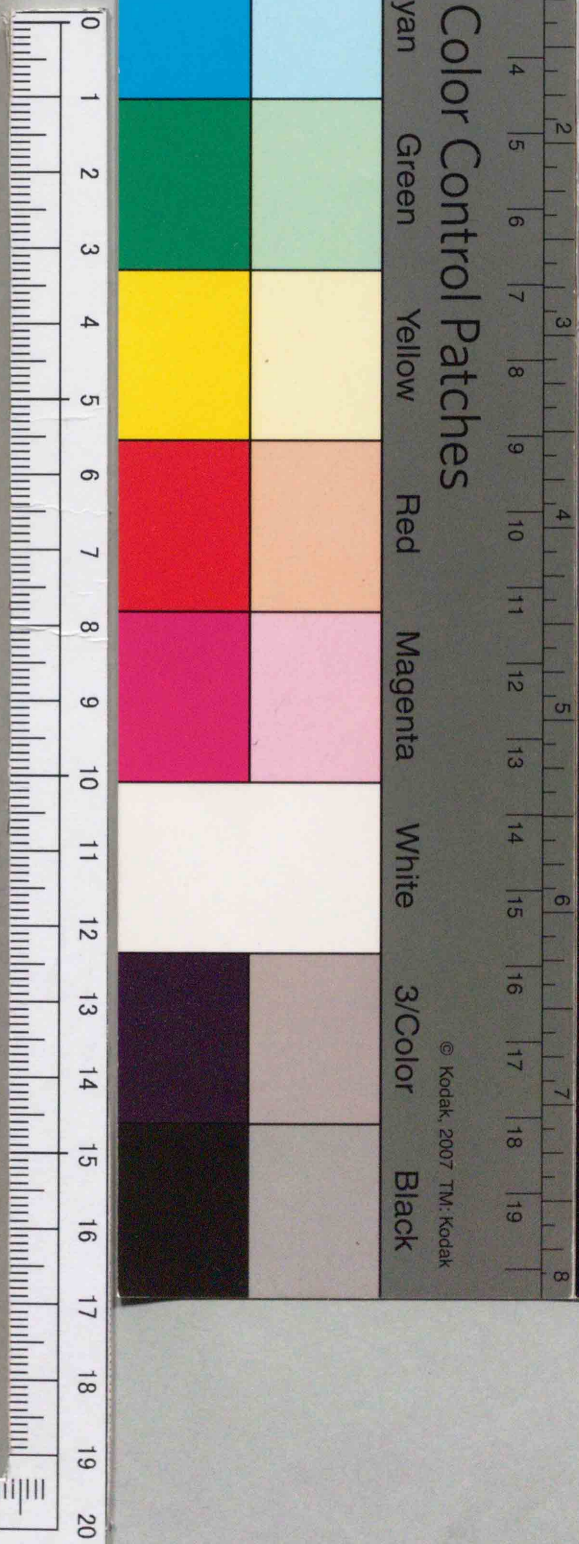


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

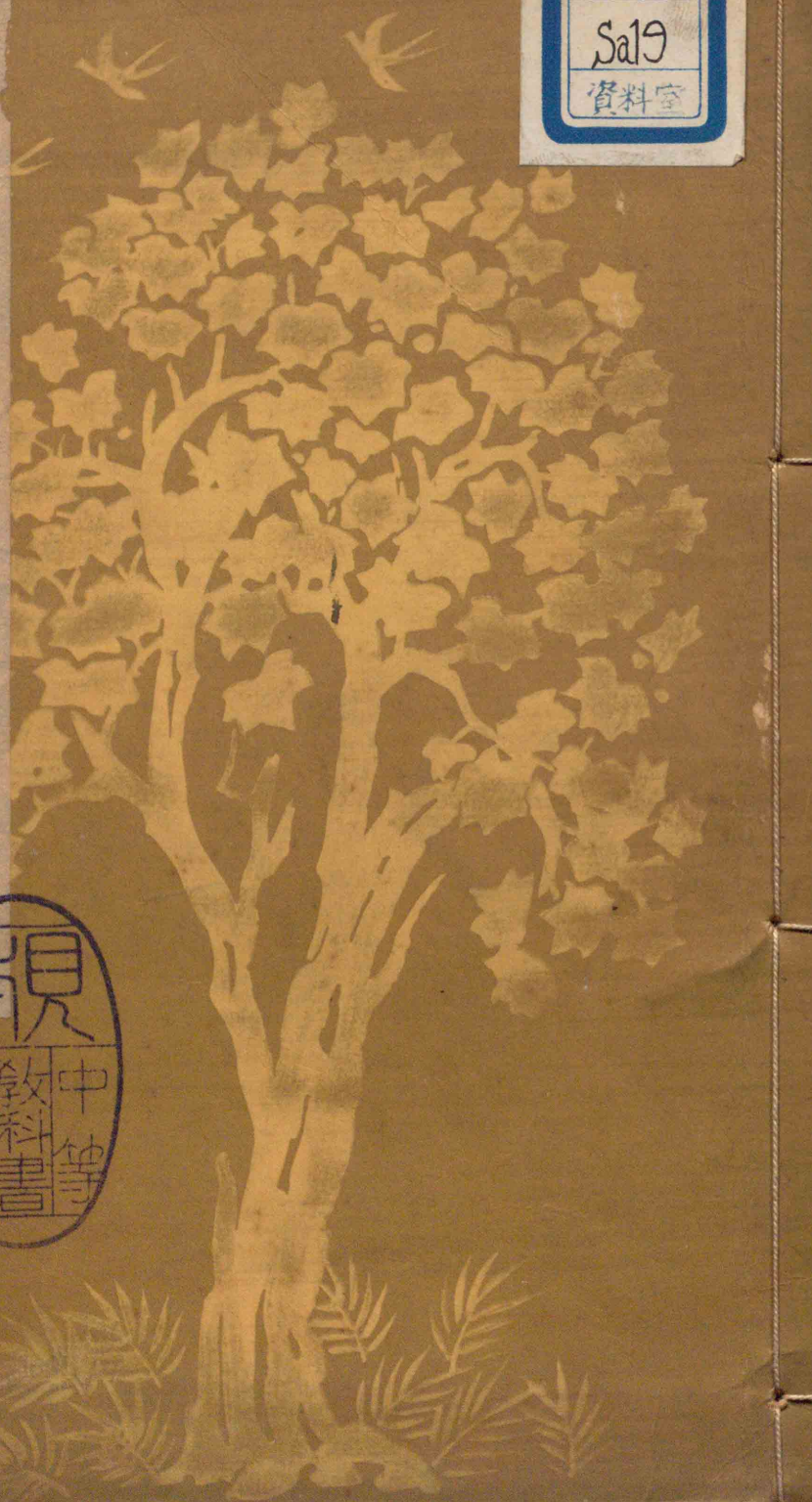
© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Sa19
資料室

最新國文讀本

卷三



370-9
Sa/9

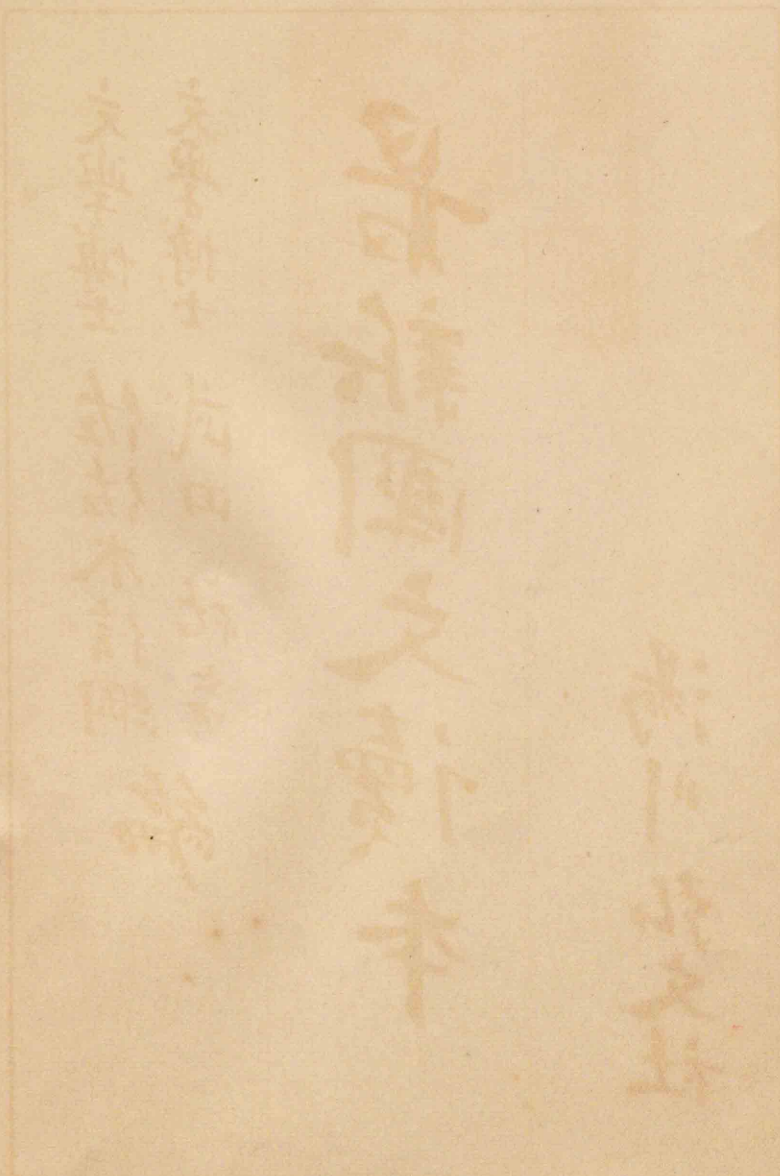
文部省檢定濟

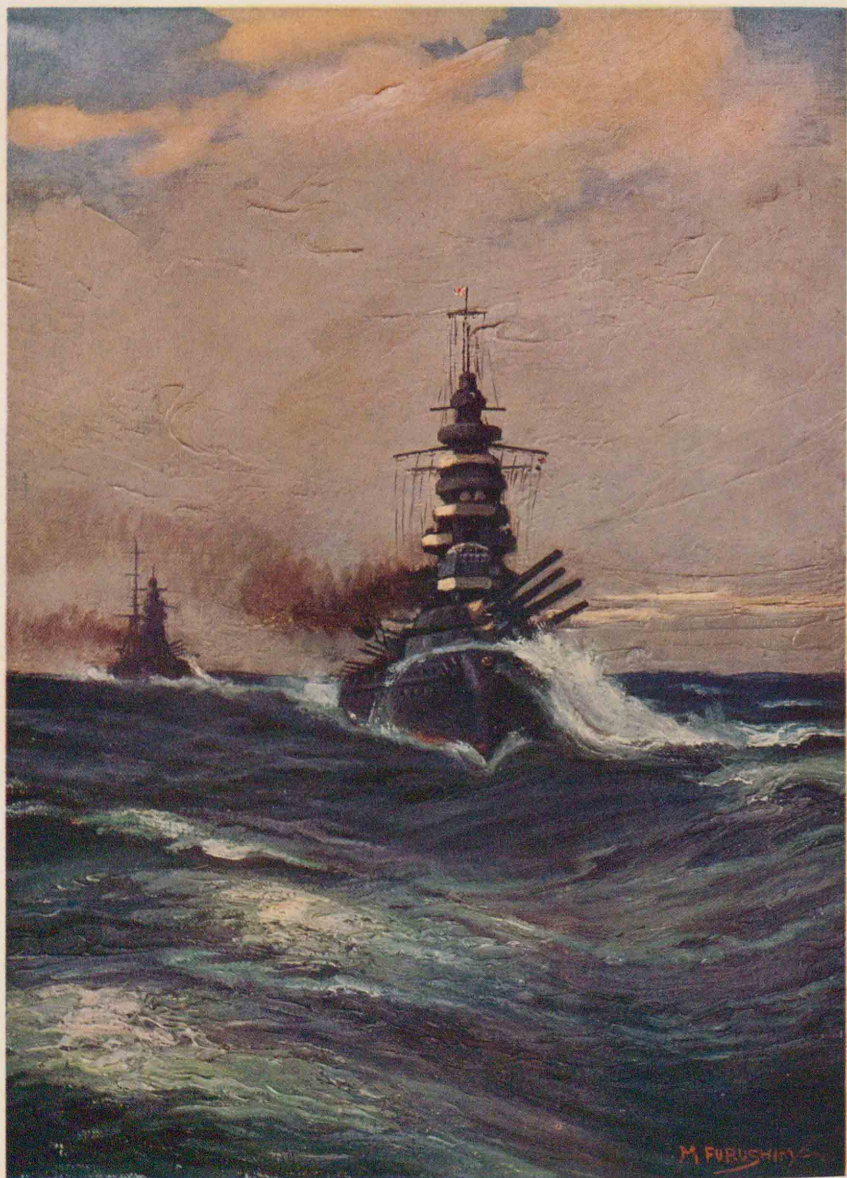
用科文漢語國校學中・日七十二月二十年八和昭
用科語國校學業實・日九十二月一年九和昭

最新國文讀本

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

湯川弘文社





筆助之松島古

軍海が我



最新國文讀本 卷三

目次

一 新しき生命
二 冬眠
三 吉野山
四 峠茶屋
五 思出
六 障子の趣味

正木不如丘
夏目漱石
薄田泣菫
鶴見祐輔

一
六
一三
一九
二七
三〇

目次

一

七一	萬米	土岐善麿	三六
八	軍艦生活の一日		四二
九	斷行	下位春吉	五七
一〇	故郷の松	野口米次郎	七七
一一	短夜の頃	島崎藤村	八三
一二	旅と歌		八九
一三	草枕		九六
一四	波と船唄	木下杢太郎	九八
一五	小園の記	正岡子規	一〇二
一六	フェアプレーの精神	大谷武一	一一二

一七	山頂に立ちて	小島烏水	一一〇
一八	山陽と法海	南條文雄	一二四
一九	西郷隆盛の度量	勝海舟	一二九
二〇	散亂心	幸田露伴	一三五
二一	碧蹄館の戦	[常山紀談]	一四一
二二	本多重次	[藩翰譜]	一四五
二三	犬山城の夕ぐれ		一五二
〔自修文〕			
一	凧あげ	前田夕暮	一五八
二	秋の海	長興善郎	一六四

三 子に送る
四 日本刀

島崎藤村 一六七
中山博道 一七九

附録

字音假名遣表
主要國字表



最新國文讀本 卷三

一 新しき生命

我等は常に新しい生命を求めて行く。

我等の前に展開せる世界は、日一日と新しい世界である。

我等は貪るやうに新しい知識を求めて、新しい世界に出て行く。こゝに驚異の世界があり、こゝに感激の生活がある。

「ナポレオンと雖もアイスクリームを食つた事はあるまい。」とは、今日の生活の如何に恵まれてゐるかを誇る言葉であ

ナポレオン
Napoleon
Bonaparte
フランス皇帝。
(一七六九—一
八二一)
アイスクリーム
Ice-cream

細胞
生物體を構成せ
る單位。

る。しかしアイスクリームの原料たる牛乳や鶏卵の美味であることは、三歳の兒童も知つてゐるし、液體が寒氣に逢へば凍るといふことも、古代から知られてゐた事實である。たゞこの二つの事實を結合するところに新しい生活が生れるのである。今日の科學の進歩は全く凄じいものがある。つて、十年前の科學書を一變させたと云つても過言では無い。しかし十年前の科學の知識が無くては、今日の科學は決して生れなかつたであらう。

舊い基礎が無くて、新しい事實の起ることは無い。我等の身體を構成する細胞は、常に新に成長増殖して行く。身長は増し、體重は増す。しかし舊い細胞があつて始めて成

放擲
ハウテキ。

温故知新
ネテハカル
シキヤ
前に習得したる
ことを研究して
新しき道理を發
明すること。

長増殖があることを忘れてはならない。父母があり祖先があつて、始めて我等が在るのだ。昔に一身のみでは無い。國家に就いても同様であり、社會に就いても同様である。あらゆる一切の物は、皆それ〴〵過去を通つて現在に到つて居り、また將來に及んでゐる。現在の我等は過去の経過を忘れてはならない。徒に歴史を放擲して、ひたすらに新にのみ赴かんとする者は、材料無くして工事を始めようとする者に等しい。

「温故知新」といふ句がある。新しい知識を得る爲には、舊來の知識を捨てずに究め、明めるといふ意味である。人類進歩の途はたゞこの一途に懸つて在るのである。

しかしながら吾人は寸時も歩みを留めてはならない。一切の事物にして、新しい生命を求めて進むことを忘れたら、それは路傍の石に等しい。即ち死物である。

「進歩無き所には退歩あるのみ。進歩せず退歩せず、中道にして留まるといふ事は出来ない。我等は新しい生命を求めて進まねばならぬ。其處に新しい世界は展開する。

人生に於て舊を守るは易く、新を拓くは容易では無い。苦心と努力とは、纔かに我等を新しい世界に導いて行くであらう。光輝ある歴史を基礎とする我等の新しい生活は、不撓の努力によつて得られるのである。發明は興り改良は成される。これは單に物質的の生活に就いてのみ云ふ

物質的の生活
物質上に重きを
置く生活。

のでは無い。精神的方面に於ても、新しい境地は、一切の宇宙の萬象に對して、新しい靈感を覺ゆるであらう。物質世界に於けると同じやうに豊富な精神世界が我等を迎へるであらう。この人間の完成に向つて、我等は斷えざる歩みを續けてゆくべきである。

去年登つた人の足痕は、

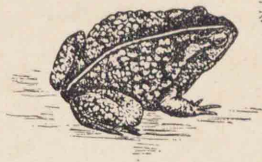
この岩陰に盡きる。

荊あざらを刈り拂ひ

岩を切り開いて、

これからが我等の新道だ。

冷血動物
體温が外部の氣
温より高からざ
る動物。



殿様蛙

あかがへる科。
體は大にして長
さ八五耗に及
ぶ。



二 冬 眠

冷血動物は冬眠と云ふ事をする。秋の末になると蛙類は、蟄も殿様蛙も雨蛙も地底にもぐり込んで、これこそ本當の長夜の眠に就く。氣温の高低の影響が直接體温に影響する動物を冷血動物と云ふ。

冷血動物は、冬になつて寒くなると體温も亦下つて來るので、すべての化學作用が低温では行ひ難くなると云ふ一般の法則で、夏中のやうな活潑な新陳代謝が行へなくなるので、活動が鈍くなつて、遂には眠つてしまふのである。これを冬眠と云ふ。蛙は、うっかり地表で冬に逢ふと、冬眠を

新陳代謝
古きもの去りて
新しきものの代
ること。

河邊
假設の人物。

グロテスク
Grotesque
怪な。奇

エネルギー
Energy 勢力。

通り越して凍死するから、秋の末になると本能的に地に穴を掘つて、地下の程よい温度の位置にいら込んで冬を待つて居る。地表から寒氣が地中に迄及ぶやうになると冬眠に陥る。

醫化學教室の河邊學士は冬眠に於ける新陳代謝の研究をして居る。實驗動物はあのグロテスクな蟄である。冬眠中は動物は極度に低下した新陳代謝を行つて、微かに生きて居るのである。心臟が微かに搏ち、浅い呼吸が續くだけであるが、然し此の心臟と呼吸との働は、いくら浅く軽くあつても、やはりエネルギーが消失するから、極く輕微ではあるが、新陳代謝がある。

消耗

墓は冬眠中は物を食はない。物を食はないで生きて居る爲には、勢ひ自分の體を消耗する外はない。生物の體には生存する爲に不必要な部分はないが、然しその必要度には違ひがある。心臟がなくては生きて行けないが、手足の肉などはなくても生きて行ける。だから冬眠の間には墓の體内で費消される部分が何處から始まるか、又次には何處に及ぶものか、といふやうな研究が河邊の研究の中心である。

河邊は、教室の光のさゝぬ地下室に墓を澤山飼つて、酒樽のなかに芋のやうに投込んで居る。

醫界ニツポンの記者が、東京の各大學の醫學部に姿を現

してから、半年近くなるから、河邊の研究室を訪れたのはまう六月近い。東京の櫻は、今年の四月の初旬に咲いたから、五月の初めになると、夕暮の山の手の家の垣には、例の墓が現れてぐうぐうと鳴いた。

醫化學教室だつて、六月になれば初夏であるが、教室の地下室へ行くと、ぞつと肌寒い。隅に四つ五つ酒樽が薄暗がり置いてある。河邊は懷中電燈を照らしながら酒樽に近づいた。

「やあ、もくもく動いて居る。」

記者は酒樽をのぞき込んだ。氣味悪くいぼだらけの墓が疊々と重なり合つて蠢いて居た。

疊々
デフデフ。かさ
なりあふさまに
いふ語。

糠味噌

「仕方がないな。」
河邊は其處に置いてある大きな氷室から、大きな氷の塊を掴み出して墓の酒樽に投込んだ。墓は動かなくなつた。彼はどの酒樽にも氷を投込んで、その中に手を突込んで、ちやくちやくと糠味噌を搔混ぜるやうに、墓を搔混ぜた。捲り上げた上腕迄が、墓のいぼにふれた。

「君も搔混ぜてくれないか。」

彼は樽の底から墓を一つ掴み出して土間に置いて、懐中電燈で照らした。

「あは、これはよく眠つてゐる。」

それを手に持つて、彼は地下室の一方のドアを開けた。

スイッチ
Switch 電路開
閉器。

一坪ばかりの小室になつて居る。

記者はこはく、小室に入つてドアを閉めた。彼はスイッチをひねつて電燈をつけた。

美しい氷柱が三本立つて居た。

「お、寒い。」

「勿論さ。」

と、彼は壁の寒暖計を見た。

「丁度攝氏零度だ。」

彼は持つて來た墓の背中に、油繪具で番號と月日とを書いた。それをぼんと床に投げてから、そこをあちらこちらと見廻した。

「君、十二と云ふ奴が居ないだらうか。」
さう云はれて記者は、初めて床を見た。自分の靴の周圍には幾つとなく墓がちつとして居る。

「君、ふんづけちやいけなよ。」

足先から寒氣が頸筋へかけて上つて來た。

「あつた、あつた。」

記者の恐怖などには全く無關心に、河邊は一匹の墓を擱んで、室の隅の小さな机に向つた。これから彼の實驗が始まるらしい。

(正木不如丘―第二診療簿餘白)

正木不如丘
醫學博士。文學者。長野縣上田市の人。明治二十年生。

吉野山
奈良縣吉野郡にあり。

吉野川
奈良縣、高見山及び大臺原山に發し、吉野郡國樺村に合し、西流して和歌山縣に入り紀川となる。

萬葉時代
萬葉集に收められたる歌の作られたる時代。

三 吉野山

吉野に遊ぶのは、これで五回目である。この前に來た時は、吉野川に沿うて溯り、萬葉時代の離宮の跡を尋ねたが、今度は花見る人に伍して、吉野川を渡つて山路にと志した。

吉野の花は麓より奥山に至るに従つて、花期が次第に遅くなる。今は麓近いあたりは既に散過ぎて、奥山の花盛りであるが、近年大都市との交通が至便になつたので、雑沓すること夥しく、閑靜に花を賞することも出來ない。しかし山深くなりまさるにつれて、次第に人影は薄れて、咲滿ちた枝々に山の小鳥の飛交ふも好點景であつた。

吉野神宮
吉野にあり。官幣大社、後醍醐天皇を祀る。
延元陵
後醍醐天皇の御陵。

むかし誰の歌
新勅撰和歌集に出づ。藤原良經の歌。



吉野山

今更いふまでもないが、吉野は花の都である。吉野川を渡つて山路にさしかゝるより、既に身は紅の雲の中に在るを覺える。吉野神宮を経て延元陵に到る間、満山の花時に松柏の翠を交へて、輝かしさは一入である。

むかし誰かゝる櫻のたねを植ゑて吉野を春の山となしけむ

吉野の花は古くから有名で、詩にも歌にも多く詠まれて

吉水院
後醍醐天皇の行在所のありし所にしつゝ、もと吉水院と稱す。明治八年改めて吉水神社となり、天皇と楠木正成とを祀る。

此處にても
新葉和歌集に出づ。後醍醐天皇の御製。

楠木氏父子
正成と正行。

ある。しかも今日この地に遊ぶ者の、特に想起するのは、主としてこの地に皇居を定められた吉野朝の御代である。後醍醐天皇が武家の専横を憤られてこの山に行幸せられたから、山上の吉水院が行在所となつた。

此處にても雲居の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに

の御製は、即ち此處での御歌である。かくして吉野朝四代の忠勇義烈の歴史は、展開して行つたのである。

實に満山の櫻花にも比すべきは、吉野朝四代の帝祚を死守した忠臣義士の意氣である。楠木氏父子の誠忠を始めとして、節義に死んだ人々の事を思ふと、懦夫をして起たし

南風不競、
國運が衰微して
振はぬ意。左傳
に出づ。

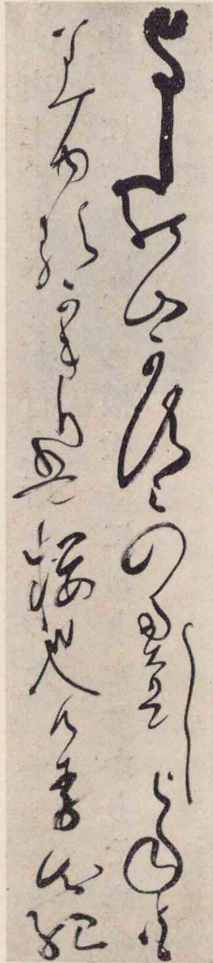
湮滅
インメツ。

よしの山かすみ
の奥はしらねと
もみゆるかきり
は櫻也けり知紀

九六 後醍醐天皇
九七 後村上天皇
九八 長慶天皇
九九 後龜山天皇

めるものがある。しかも世は概ね南風不競を唱つて、天日
を蔽ふ浮雲のみ深かつた事は、誠に慨嘆に堪へない所であ
る。

さればその史實の如きも多く湮滅に歸して、甚しきは吉
野朝時代の天皇の御代數の如きも、從來明徴無く、後醍醐後



筆紀知田八

村上後龜山の三帝を數へ奉る三代説と、後村上天皇の次に
長慶天皇を加へ奉る四代説とがあつて、一定しなかつたの
は誠に恐懼すべき極みであつた。然るに幸にして近年に

大正十五年十一
月
同年十二月二十
五日昭和と改
元。

至つて、長慶天皇の御在位を確認し奉るべき史料發見せら
れ、遂に大正十五年十一月二十一日、長慶天皇御歴代御加列
の御儀あり、次いで國定教科書等の訂正を見るに至つた。
余も亦史料發見の功を以て、特に宮内省に召されて恩賜を
忝くしたのは、身に餘る光榮といふべきである。

源氏物語
五十四卷。紫式
部の作。平安朝
時代の物語。
仙源鈔
一卷。長慶天皇
の御撰。源氏物
語の詞をいろは
順に類舉して解
釋せるもの。

この新發見の史料に據る長慶天皇の御治世は、從來の四
代説とは全然面目を異にし、天皇は十數年間御在位あらせ
られたことが推定せられた。天皇は後村上天皇の皇長子
にましく、和漢の學に達せられ、國家統一の大業に終始せ
らるゝ傍、源氏物語の最初の専門辭書として注意すべき仙
源鈔の御撰も殘されてゐる。

今や天日昭々として隠れたるを顯し、大義名分を正すべき聖代に當り、往時を追憶すると、誠に無量の感慨を禁じ得ない。

奥の苔清水に西行法師が庵の跡を訪ねる頃ほひ、小雨がはらくくと落ちかゝつて來たが、大降りにはならなかつた。

(武田祐吉)

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方三丁ばかりわけ入るほど、柴人のかよふ道のみわづかにありて、さかしき谷を隔てたる、いと尊し。かのとくくの清水は昔にかはらずと見えて、今もとくくと雫落ちける。

露とくくこゝろみに浮世すゝがばや

(芭蕉)

四峠茶屋

「おい。」と、聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに廂から吊されて、屈託氣にふらりと揺れる。下に駄菓子だ菓子の箱が三つばかり竝んで、側に五厘錢と文久錢が散らばつてゐる。

「おい。」と、又聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の上に、ふくれてゐた鶏が、驚いて眼をさます。ク、ク、ク、と騒ぎ出す。敷居の外に、土竈どくわが今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。土の

屈託氣

文久錢
ブンキウセン。
文久年間に鑄た
る錢。

床几
シャウギ。



石 漱 目 夏

茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。返事がないから、無断でずつと這入つて、床几の上へ腰をおろした。鶏は羽搏をして、白から飛びおりる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、コケツコツコと云ふと、雌が細い聲で、ケ、ツコツコと云ふ。丸で余を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枡ほどの煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るの知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第に收る。

とぐろを捲く

寶生

ホウシャウ。能の一派。寶生蓮阿彌を祖とす。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさりと開く。中から一人の婆さんが出る。どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。土竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は呑氣に燻つてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の店を明放しても苦にならないと見える處が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。こゝらが非人情で面白い。其の上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時こ

高砂

タカサゴ。能の
一。阿蘇の神主
友成が京都に上
る途中、播磨國
(兵庫縣)高砂に
て、松の化身と
物語ることを作
りしもの。

橋懸

ハシガカリ。能
の舞臺と樂屋と
を結ぶ通路。欄
干ありて、橋の
如く造れり。

カメラ

Camera 寫眞
の暗箱。

れは美しい活人畫だと思つた。箆を擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向きになつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が、今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞むきに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、其の表情はびしやりと心のカメラへ焼附いてしまつた。茶店の婆さんの顔は此の寫眞に血を通はせたほど似てゐる。



峠の茶屋

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸お困りでござんしよ。おゝゝ、大分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し燃し附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。さあ御茶を一つ。」と、立上りながら、しつゝと二聲で鶏を逐ひおろす。コ、コ、と駈出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。

焦茶色の疊

割拔盆
クリヌキボン。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか割拔盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無雜作に焼附けられてゐる。

「御菓子を。」と、今度は鶏の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒とを持つて来る。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて土竈の前に踞る。

余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

袖無し
左右の袖がなく
丈短くして羽織
の如き衣服。

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聴きたいな。ちつとも聞えないと猶聞きたい。」

「生憎、今日は先刻の雨で何處かへ逃げました。」

折から土竈のうちが、ばちくくと鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあ、おあたり。嘸お寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い烟が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板廂に絡んでゐる。

「あゝ、好い心持だ。御蔭で生返つた。」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら、天狗巖が見え出しました。」

痕
アト。

逡巡 シュンジュン。

巘岼 サングワン。

逡巡として曇勝ちなる春の空をもどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の思切りよく通抜けた前山の一角は、未練もなく晴盡して、老嫗の指さす方に、巘岼と荒削の柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。

(夏目漱石―草枕)

晉ノ孫楚、少キ時隱居セント欲シ、王濟ニ謂ヒテ、當ニ石ニ枕シ流ニ漱ガント欲ス。ト曰フベキヲ、誤リテ石ニ漱ギ流ニ枕ス。トイフ。濟曰ク、流ハ枕スベキニ非ズ。石ハ漱グベキニ非ズ。ト。楚曰ク、流ニ枕スル所以ハ、其ノ耳ヲ洗ハント欲スレバナリ。石ニ漱グ所以ハ、其ノ齒ヲ厲カント欲スレバナリ。ト。

(蒙求)

五 思 出

春の夜はしづかに更けぬ
はゆま路の竝木のけぶり
箱馬車は轍をどりて
宮津より由良へ急ぎぬ

朧夜の窓のあかりに
京むすめ難波商人
朽尼や切戸まうでや
人の世の旅の道づれ

はゆま路

驛路のこと。

宮津

京都府與謝郡宮津町。

由良

京都府加佐郡由良村。

朽尼

老いて勤の役に立たざる尼。

切戸まうで

切戸の文殊堂詣でのこと。切戸の文殊堂は京都府與謝郡吉津村大字文殊の海濱天橋立の南方にあり。臨濟宗の寺。

おくび
胃中の瓦斯が食
道を通りて口に
上り出づるもの。

追分節
俚謡の二つ。

さゝら水なみ
小波のこと。



物がたりおくびまじりに
眠り目のとろむとすれば
誰が子にかしりへの方に
をりからの追分節や

清らなる聲ひとしきり
溪あひのさゝら水なみ
咽び音に響きわたれば
乗合は涙こぼれぬ
月落ちて闇の夜ぶかに
箱馬車は由良へとゞきぬ

客人は車をおりて
西東みちに別れぬ

その後や幾春へけむ
おほかたは夢にうつゝに
しのびてはえこそ忘れぬ
由良の夜の追分上手

その子いま何處にあらむ
おもひでの清きかたみや
人々のこゝろに生きて
とことばに姿ぞわかき

えこそ忘れぬ
忘れえぬ。

(薄田泣菫—二十五絃)

六 障子の趣味

日本に歸つて来て、嬉しいものゝ一つは障子である。家の中に坐つて、白い障子の紙を通して來る光線を眺めるくらゐ、心持のよいものは少い。障子は晴れた日によく、雨の日によく、燈火をつけた夜には、更によい。

私は自分の書齋がどうも氣が落著かないので困つてゐた。しかしどういふ譯とも知らずに四五年ほどを過して來た。つい近頃、それは障子が少いのだと氣がついた。三方の一方だけが障子で、他の二方を擦硝子にしてあつたために、机に落ちて來る光線が散漫で、氣が落著かなかつたの

書齋
シヨサイ。

風土
土地の状態、氣候
性情
こゝろだて。

である。そこで、二方の硝子戸のところへ日本の障子を立て、見たら、すっかり部屋に落著きが出来て、いくら書きものをして居ても草臥れなくなつた。やはり我々の祖先はこの風土と我々の性情とに適するやうな工夫を、住居の上にも凝らしてくれてゐたのである。

日本の風景を美しくするものは、やはり此の障子である。久方振で日本に歸つて來て、灯ともし頃の民家につく「あかり」を、車窓から見渡す氣持は何ともいへない。四邊の光景が、白い紙に明々と映る燈火の色で柔いで來る。それに人影の障子にうつる様子などは、日本でなくては見られない情緒である。

情緒
ジャウシヨ。思
につれて種々に
起る情。

その代り、冬時の寒さを凌ぐ手段としては、これは又驚くほど不完全なものである。或佛蘭西の婦人が、始めて日本の家で冬を過した時に、

宇宙
ウチウ。

「日本人は驚くべき國民だ。一枚の紙を以て全宇宙と戦ふ。」

と、いつたといふことであるが、如何にも面白い見方であるとおもふ。西洋人殊に亞米利加人が、日本へ來て羨しがるのは、日本建築の白木造である。木を自然のまゝに出して使つてゐるのが、たまらなく氣に入るらしい。それは日本人について、木造の家を好むのは、亞米利加人であるからである。亞米利加に於ける木造の家は初代植民の頃の家で

摩天樓
マテンロウ。
高層建築をいふ。

あつて、今は次第に鐵筋コンクリートの摩天樓に變りつゝある。彼の國人が、その昔の風情をなつかしむところから、さてこそ日本の木造の家を羨しがるのである。或亞米利加人は、私の家に来て、木の柱を幾度も撫でながら、「いゝなあ、いゝなあ」と、子供のやうに羨しがつた。

此の夏、始めて私を訪問した年若い學者が、その次に會つた時に、

「あなたが白足袋で、日本の家に住んでゐようとは思はなかつた。日本趣味ですね。」

と、驚いたやうにいはれた。それが私には大そう可笑しかつた。私が米國のことを書いたり、折々外國へ出かけたり

永井荷風
名は壯吉。小説家。外國語學校修學。永く海外にあり、歸朝後慶應義塾大學教授たり。明治十二年東京に生る。

野口米次郎
詩人。慶應義塾修學。永く海外にあり、歸朝後母校の教授たり。愛知縣の人。明治八年生。

被布
ヒフ。羽織に似たるまるえりの衣服にして、上衣の上に著するもの。老人・女子など多く著用す。

するので、日本に居ても年中洋服を著て、椅子に腰をかけてあるものと想像して居られたらしかつた。
しかし、我々日本人は、外國に長く居れば居るほど、妙に日本趣味になるものである。永井荷風氏も、野口米次郎氏も、また新渡戸稻造先生も、皆日本趣味を好まれる。私の伯父は十六の時に獨逸に行つて、十三年たつて歸國した人であるが、始めこそは洋館を建て、洋服を著て暮してゐたが、いつの間にか洋館に疊を入れ、次には離れた茶室を造り、後には、その茶室に籠城して、被布を著、佛書の中に埋つて死んで行つた。これは日本人ばかりでなく、張之洞を初め、支那の新知識の人達の話を聞いて見ても、これらの人たちも、やは

張之洞
支那清朝の名臣。直隸省生。新知識の人

り年と共に西洋生活から支那生活に歸つたさうである。つまり、東洋文化といふものが、一種の強い力を以て、我々を牽きつけるのであらう。私は今日の日本が、美しい日本趣味を次第に失ひつゝあることを悲しむ。それも風雅な日本趣味と共に、純粹な西洋藝術が並び興るのならよいが、安つばい俗悪な文化住宅なんぞばかりが出来て、固有の日本趣味が亡んで行くのは、如何にも残念である。あの新興國で殺風景な亞米利加ですら、美しい町、美しい村、美しい家を作らうと努力してゐるのに、藝術の國日本において、繪卷物のやうな傳統の美しさの、次第に失はれ行くのは、まことに寂しい極みである。

(鶴見祐輔―中道を歩む心)

繪卷物
繪畫の卷物。

七 一 萬 米

三周……四周……。

その頃から間隔が著しく違つて來た。

東西對抗の陸上競技も、今年は第五回で、その決勝に出場すべき選手たちの意氣は、關西も關東も猛烈で、新しい記録が期待された。

この一萬米も、今年からトラックで行はれることになつたから、觀衆は一目に選手の力量・技巧、並びに作戦を大觀する事が出来るわけで、四百米のハードルや、千六百米のリレーなどと共に、トラックの新しい興味になつてゐたのであ

東西對抗の陸上
競技

東京朝日新聞社
主催の陸上競技
會にして、明治
神宮外苑に於て
行はれしもの。

トラック

競走路。

ハードル

Hurdle-race の
略。障害物競走。

リレー

Relay-race の
略。中継競走。

る。何しろ一萬米といへば、里程にして約二里半、四百米のトラックを廿五回まはらなければならぬ。一人でゆつくり驅けるのさへ、いや歩くのさへ一通りではないのに、一著・二著を争つて多數と競走するのである。

選手達の日頃の練習も思はれて、スタートと共に、晩春の風冷たき神宮外苑スタンドは、どよめいた。

長距離なので、百米や二百米などのやうに、スタートの息づまるほどの緊張さはないが、數も多く、姿も思ひくゞ色さまさまの賑はしさに、選手は各自その練習の態度と姿勢とを守りつゝ、快走する。

そのなかに一人、へうきんな赤帽を冠つて、勝にちよびひ

スタート

Start 出發。

スタンド

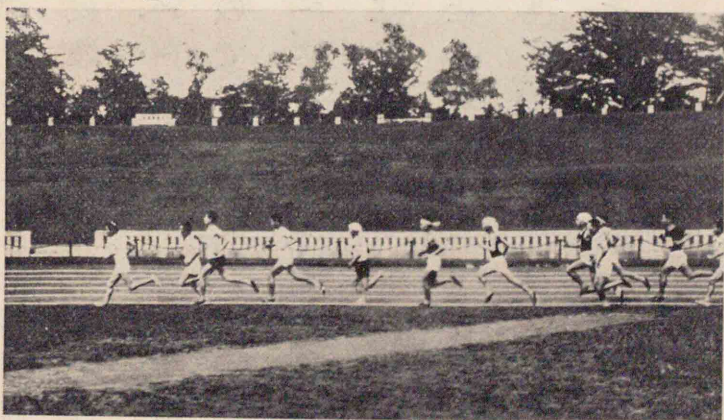
Stand 觀覽席。

へうきん

風體

げを生やした選手がゐた。地方青年團の一人であつた。スタートの時から逸早くその風體が觀衆の眼をひいて、競技場の空氣に一種の愛嬌を作つた。が、彼は十周位からいつか先頭の選手と一周近く遅れてしまつた。

審判委員の一人は、選手が審判臺の邊へ來るごとに回數をしるした紙をめくつて、「あと何回！」と呼びかける。これが選手を一層元氣づける。



一 萬 米

あゝ、一周々と減つてゆくその回數の痛快さよ。しかし一周遅れた選手に對しては、なほその一回だけを多く呼びかけられることは言ふまでもない。その度に赤帽の選手は、にこくと審判員に微笑を投げつけて通過する。そしてまつしぐらに走路を辿る。

最初スタートの線上にあふれるほどであつた選手も、一人、また二人、青空に吸はれたか、大地に沈んだか、その影を消してゆく。さういふ落伍者のある中に、遅れても最後までと、彼はねばり強く、兩脚に青春の意氣をみなぎらせつゝ、額の汗をぬぐひもあへず、しかも悠々と急がず、あせらず、一周とトラックの土を踏みかためる……。

落伍者

彼は一周遅れたので、先頭のすぐあとを追つて行く。一周の差さへなければ、さながら先頭を争つてゐるやうに見える。

「赤帽しつかり！」

「ひげさん頼むよ！」

豫選なので、競技といつてもこんな聲援に何處かくつろいだ空気が漂ふ。やがてピストル一發、すでに第一著第二著は決定したが、なほ一周餘りを残した彼は、依然として悠悠とトラックを驅けて、自分だけの最後の突進もあざやかに、決勝點を踏んだのであつた。しかしそれは、まう「決勝點」ではなかつたのだが――。

ピストル
Pistol

その勝敗を眼中におかないで、走るだけは走る、といふ態度の痛快さに、スタンドの觀衆は思はず一齊に、第一著の勝利者に送つたと同様な拍手を彼に送つた。彼ははじめて赤帽をぬいで、それを右手に振りながら、こくと退場した。

一萬米、その競技に、この選手が勝利者でなかつたことは明かである。しかし「人間」としての生活態度に於て決して彼は「敗北者」ではない。彼は最後まで自分の力を信じ、他を顧みることなく、明快な心境をもつて走つてゐたのである。

(土岐善麿―春歸る)

生活態度

土岐善麿
歌人。東京朝日
新聞記者。明治
十八年生。

八 軍艦生活の一日

軍港
こゝにては横須賀軍港を指す。
ガントリー・クレ
ン
Gantry crane
造船用起重機。

房州
千葉縣の一部。

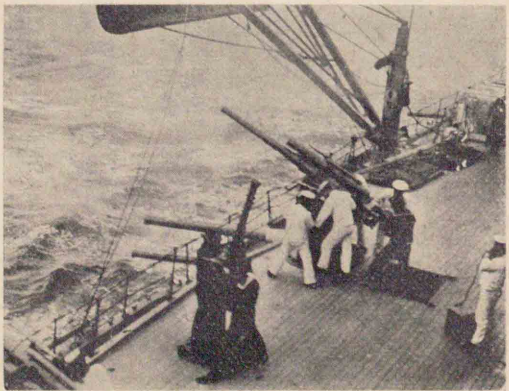
軍港を廻る低い山々の頂に朝の光がさしそめると、大小
 数々の艦艇は、あるものはガントリー・クレエンの直下にある
 ものは岸壁に倚添ひ、あるものは沖遠く、どつしりとした其
 の姿をはつきりと顯し出す。時鐘番兵の打鳴らす鐘の音
 を受けて、傳令員の美しい聲が、艦の隅々まで澄透る。静寂
 そのものと見えた艦内は、忽ちにして活動の巷となる。釣
 床收め方・總員體操・露天甲板洗ひ方が慌しい裡にも規律正
 しく行はれ、少しの汚れも留めない檣材の甲板は、見る眼も
 すがくしくしつとりと濡れて、今しも房州の山を離れた

居住甲板
乗組員の居住す
る甲板。概ね中
下甲板なり。

衛兵司令
衛兵の指揮者。
衛兵
警衛の兵士。

朝日に照らし出される。煙草盆を圍んだ少時の休憩が済
 むと朝食となる。居住甲板拭ひ掃除・金物手入・武器手入・甲
 板掃除と、次々に朝の行事は進んでゆく。

午前八時、軍艦旗掲揚式が舉行さ
 れる。衛兵司令の指揮する衛兵隊
 は、艦尾の旗竿に向つて整列し、軍樂
 隊の吹奏する君が代につれて、紅燃
 ゆる軍艦旗は、吹く朝風にひらめき
 ながら、静々と上つてゆく。其の間、上甲板に居る者悉くが、
 軍艦旗に向つて恭しく敬禮するはもとより、軍樂は同時に



(一) 習 演 大

高聲電話に依つて艦内隈なく放送され、艦員一同起立敬禮しつゝ、この嚴肅にして清淨なる行事を終るのである。

所屬軍港に數日を送つて、船體・機關・諸兵器の手入を終り、需品・燃料・被服・糧食の補給を受けた艦隊は、護國の大任を擔つて、向ふ半歳の猛練習の爲に、今日しも母港を離れるのである。

朝日に輝く軍艦旗を仰いで、身も心も引締められた艦員は、雨の如く下る號令のもとに出港準備に忙しい。

艦隊は順次解纜出港する。港外に出ると、艦隊は長官の令に依り、縦陣列を形作る。先頭から巡洋艦・潜水艦隊・水

艦隊・主力艦隊、殿が特務隊、是等が蜿蜒長蛇の陣を列ねて、東京灣を南下する。上半身を雪に掩はれた富士の靈峰は、朝日の光を一面に浴びつゝ、箱根・足柄連嶺の上に仰がれる。東の方、房總半島の磯村を包んだ朝靄は大方霽れて、鋸山の尖つた頂がくつきりと綠色の空をかざる。追濱を飛立つた飛行機は、銀翼を打連ねて軍港の空を舞ふ。稍、冷たい朝の潮風は、艦尾の軍艦旗を心地よくはためかせ、舷側を叩く小波は、韻律的な響を齎らしてくる。第一第二海堡の間を抜けて觀音崎を廻れば、大島ははや指呼の間に在る。艦内では既に教練を開始した。砲員は砲術長指揮の下に、精巧な砲機の操作に熱中する。三十六糎の巨砲はまさ

マスト
Mast 帆柱。

蜿蜒

エンエン。うねりくねるさま。

箱根・足柄連嶺

箱根山は神奈川県西境を劃する大火山。足柄山は箱根火山に屬する金時山の北に延互する連嶺。

鋸山

千葉縣の西南にあり。

追濱

神奈川県横須賀市にある飛行場。

海堡

カイハウ。海中に築きたる砲臺。

觀音崎

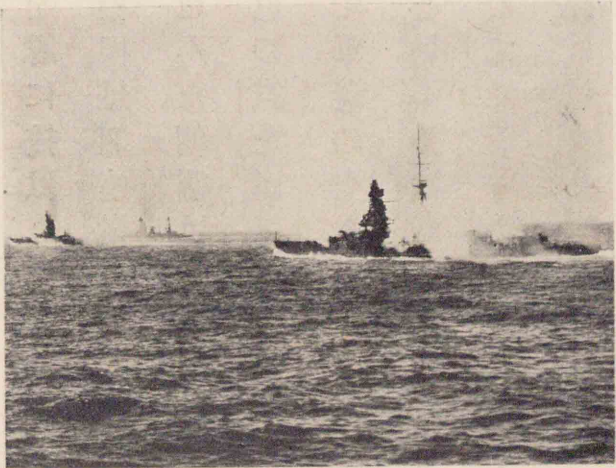
神奈川県三浦半島の極東にある岬。砲臺の設あり。

指呼の間

さして呼ばば、應ふる程の間近かなること。

旗旒
キリウ。旒は、たれのつきし旗。旗旒にて各種の旗を指す。

に天空を衝く。水雷員は魚雷の調整、發射管の操法に、電信員は電鍵に、信號員は旗旒に、各その戦闘術力を磨く。あらゆる機會を利用し、あらゆる方法を盡して、術力の向上を圖り、以て必勝の信念を育成するのである。午前の課業が終ると、勤勉な戦友主計兵の用意した食卓につく。朝から憩ふ暇とても無い猛烈な訓練作業の勞苦も、温かい食卓を圍む一時の歡談に忘れ去られるのである。



大演習(二)

横須賀
神奈川県三浦半島の東北、東京灣内の小灣内に位する軍港。
有明灣
鹿兒島縣大隅半島の東北にある灣。

砲煩
ハウコウ。大砲。機關は全力待機とせらる。命令一下、直ちに全速力となし得る如く機關を準備し置くこと。

午後は、艦隊の對抗演習が實施される。演習の想定は、互に決戦の意圖を以て、甲軍は今朝横須賀軍港を、乙軍は昨夕有明灣を出港せり。といふに在る。以上の想定に對して甲軍の採るべき戦法は、速かに乙軍を索め、全軍を提げて之を撃滅することと決せられた。

演習開始前、各艦は防水扉を閉鎖し、防火其の他の應急準備を施すなど、十分な戦闘準備を整へ、總員戦闘部署に就く。砲煩・魚雷等の攻撃兵器は、其の試動を終つて全力發揮を待構へてゐる。機關は全力待機とせられ、何時にても全速力を出し得る状態に置かれてある。定刻、演習開始の令は電波となつて飛ぶ。各部隊は漸次速力を増して警戒配備

無線封止
無線電信の發信
を中止又は制限
すること。

に就く。航空母艦からは、數臺の飛行機が發進し、遠距離搜索に赴く。主力の直上は敵飛行機に對し、直前は敵潜水艦に對し、それ〴〵飛行機を以て警戒する。驅逐艦は主力の前に半圓形陣を作り、敵潜水艦に對し警戒の任に當る。艦内に於ては、見張員が雙眼鏡を手に遠近を警戒する。無線封止は令せられ、電波の輻射に制限が加へられる。敵が味方の發する電波に依つて、味方の位置を探知するのを防ぐためである。反對に電信員は敵の電波を搜して、その所在を測定しようと努める。

緊張と待望との間に、約二時間は過ぎた。忽ち飛報來る。「敵艦見ゆ。」味方偵察機からである。一同の顔に興奮の色

變針
針路を變ずること。

遽かに
ニハかに。

が漲る。報告には、更に敵の兵力・位置・發見時刻等が附加へられてゐる。次いで敵主力の發見が報ぜられる。全艦隊は忽ち全速力に増速、直ちに之に向つて變針した。しかし彼我猶百哩を距てゝゐるのである。青空には斷雲が去來する。上空の飛行機は爆音勇ましく警戒を續けてゐる。戦闘速力の艦艇は、艦首に高い白波を切り、艦尾には物凄い許りの渦流を残す。波浪は互に干涉して海面は遽かに荒れ狂ふ。

飛行機から續々情報がくる。無線封止も一部解かれて、通信量は頓に殖える。電信室では受信紙の上を走る鉛筆の音と、電信員の敲く電鍵の音とが、囂しく交錯する。作戦

空氣傳送管
多數の通信物を
一時に傳送する
ため、圓筒に入
れ、發信には壓
搾空氣、受信に
は稀薄空氣を用
ひ、金屬管内を
通過せしめて遞
送する装置。

室では幕僚が海圖を圍んで作戰計畫に餘念がない。空氣
傳送管は頻りに音を立て、電報を運ぶ。

前衛の巡洋艦からも敵艦見
ゆ。との報告がくる。主力艦は、
射出機に依つて、艦載飛行機を
射出した。飛行機は爆音高く
上空に舞ひ上つて任務に就く。
味方巡洋艦戦隊は集結しつゝ、
早くも敵前衛部隊と砲火を交
へ始めた。我が艦橋からも、敵
の巡洋艦を認める事が出来るやうになつた。しかしまだ



甲板上の一日

霧地に
マツシゲラに。

霧進
バクシン。

水煙模糊

水煙がたつてぼ
んやりとして明
かならぬさま。

測的

目標の距離を測
ること。

雷霆

ライテイ。

海若

カイジヤク。

敵主力は見えぬ。全艦隊は霧地に推定方向へ突進する。
間も無く、前衛巡洋艦から敵主力の精確な位置、針路、速力
等を報告して來た。航空戦隊の爆撃隊は進發した。偉大
なる空の闘士は、其の美事な銀翼を驅つて、一路敵主力に肉
薄する。水雷戦隊も警戒幕を徹して集結しつゝ、巡洋艦隊
に續いて霧進する。

兩軍主力も次第に近接し、今や艦橋より水煙模糊の間に、
敵主力の巨體を認め得るやうになつた。主力艦は測的を
開始した。最大仰角の主砲、檣上高く翻る戦闘旗、長官は無
線電信を以て、主力艦の射撃開始を令せられた。
主砲は火蓋を切つた。雷霆はためき、海若怒る。三萬噸

艦撞
モウドウ。

の艦撞もために震動する。巡洋艦も驅逐艦も、皆敵を打ちつゝ、自己の進路を開いて進撃する。砲煙は海上一面に罩めわたる。

高角砲
高仰角にて發射し得る砲。飛行機の襲撃に對する防禦兵器。

敵の爆撃隊が現れた。味方戦闘機は忽ち之に向つて突撃する。つるべ放つ高角砲。機銃も打ち方を始めた。

機銃
機關銃に同じ。

見張所は潛望鏡を發見して報告する。艦長は直ちに轉舵を令して、潜水艦の發射した魚雷を避航する。

潛望鏡
潜水艦が潜航中海面を望見し得る如く裝備せる眼鏡。

味方の水雷戦隊は、まう突撃を開始した。主力は益々敵に近迫して之を猛撃する。咆哮する主砲。

咆哮
ハウカウ。さけびといろく。

敵の煙幕機は煙幕を展張した。煙幕に隠れて敵の驅逐艦も襲撃して來た。魚雷は發射された。主力艦は一齊回

韜晦

タククワイ。形跡などをつゝみかくす。

燈火管制

敵に己が所在を知らしめず、しかも我が作業上何等支障なき如く要時要所の燈火を處理すること。

御前崎

オマヘザキ。静岡県西南に突出し伊豆半島尖端の石廊岬と相對して駿河灣口をなせる岬角。

頭に依つて之を避航する。

戦闘は猶酣であるが、日ははや水平線の彼方に没し、夕暗は漸くあたりに迫つて來た。長官は夜戦部署を令せられた。主力部隊は韜晦して翌朝の會合點に急航せんとし、巡洋艦戦隊及び水雷戦隊は夜戦攻撃部隊を組織して、敵主力に接觸を保ちつゝ、夜暗を利用して襲撃を計畫する。

各艦は燈火管制を行つた。艦外に洩れる光は全く無い。今は四邊全く暗黒、空には星もない。たゞ御前崎の燈臺の光が遙かに北の水線に點滅するのみである。風は夜と共に稍々力を加へて來た。長濤が舷側を打つて、時に甲板上に飛沫を上げる。

艦内では、戦闘部署に就いて警戒を嚴にしながら、交代で食事を取る。見張員は暗の中に、一點の漏光・艦影をも見逃すまじと意氣込む。音も無く色も無い。

緊張せる静寂の一ときは過ぎた。忽ち暗中に、敵駆逐艦の來襲を告げる聲が聞える。「警戒」が令せられる。總員戰鬥配置に就いて、次の號令を待つ。敵驅逐艦は益々肉薄する。初めは變針を以て只管韜晦に努めたが、敵もさるもの、我に接觸して離れようとせぬ。艦長は斷然之を擊攘するに決した。命令一下、星彈が飛ぶ。沈黙は破られた。星彈は敵の上空に炸裂する。青白い星光は燦爛として花火の如く輝き落ちる。射撃は開始された。星彈は次から次へ炸裂

星彈

夜戦に際し目標を照らすに用ふる發光彈。

炸裂

サクレツ。火氣によつて、はじけさくること。

燦爛

サンラン。うつくしくかゞやくこと。

熾烈

シレツ。

修羅場

シユラヂヤウ。戦のために慘澹たる光景を呈したる場所。

する。探照燈の照射も令せられた。射撃はいよいよ熾烈を極める。暗黒静寂の天地は、忽ちにして一大修羅場と化した。遙か南方の水平線にも、探照燈の照射や、星彈の炸裂が認められる。味方夜戦部隊が今正に勇敢なる突撃を執行してゐるのである。

酒保

廳で、演習終結が令せられた。燈火管制は復舊せられ、航海燈は點ぜられる。酒保が開かれる。兵員の食卓では一杯の麥酒に手柄嘶がはずむことであらう。巡檢後の後甲板は、和服に著替へた士官の俱樂部となる。火繩一本の煙草盆の周圍で、燃ゆるが如き青春の元氣を其のまゝに吐き

次室士官
各科中少尉の公
室を士官次室と
いふところより
中少尉を次室士
官と通稱す。士
官室士官といへ
ば大尉以上な
り。

諄々
ジユンジユン。
リギン
Rising 船内
に張渡せる網
具。
飄々
へうへう。

出す次室士官の一群。片方には諄々と説く老提督を圍んで、日本海海戦の實戰談に耳を傾ける士官室士官の一團。太平洋上の夜は漸く更けて、風更に加はつたか、リギンを搖がしては飄々と鳴りしきる。猶、談論に倦むを知らぬ同僚に一揖して立上れば、二十日あまりの月は星影疎な中空に輝いてゐる。

わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの雲ゐにま
がふ沖つ白波
雲かゝるわたのみ中にあら潮を雨とふらせて鯨
うかべり
(藤原忠通)
(加納諸平)

九 斷 行

アドリヤ海
Adriatic Sea
伊太利の東方に
あたる地中海の
一部。
アンコーナ
Ancona 伊太利
中央部東海岸の
港。
埠頭
フトウ。とはは、
自動艇
發動機で動
く小舟。
リッツォ
Luigi Rizzo
後に海軍中佐。
伊太利の人。
アオンツォ
Aonzo
Giuseppe
Aonzo
プレムーダ
Premuda タッ
ルネロ灣口の群
島。
靱殻
モミガラ。

アドリヤ海は、今しも夕陽を浴びて眞紅の色に染められ
てゐる。風もそよがず、波も立たぬ。それが何時ともなし
に夕闇の色に塗換へられて、間もなく伊太利のアンコーナ
港の埠頭を二隻の自動艇が離れた。二筋の白い線を引い
て北へくと走る。その一隻にはリッツォ少佐、他の一隻
にはアオンツォ少尉。何れも六人の水兵を乗せてゐる。
彼等は敵岸近きプレムーダの群島中に身を潜めて、明朝ま
で敵狀偵察の任に當つた。
二つの靱殻のやうな自動艇は、舳を眞直ぐに小ルツシン

舢
小ルッシン島
Lussin クッル
ネロ灣口の島。

東雲
シノノメ。

クッルナローロ
Quarnarolo

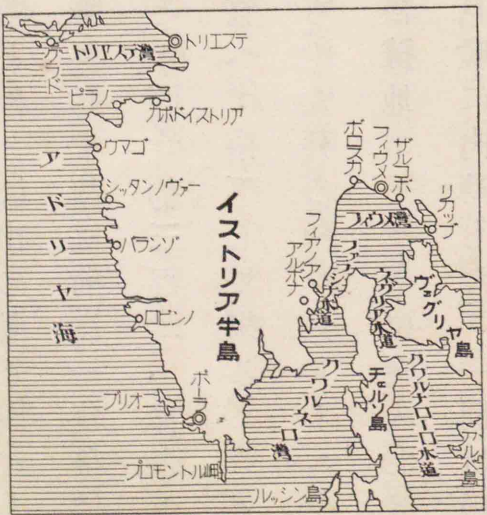
サンセーゴ
Sansego アド
リヤ海の東にあ
る島。

島に向けてゐる。著いたのは午前一時頃、その島蔭に船を留めて、よき敵もやと待伏しながら、四方の偵察に忙しい。しかし何等の異状もない。時は刻々に移つて午前三時になつた。もはや東雲に近い。根據地に引上ぐべき時間だ。リッツオ少佐は歸航準備を命じた。かくて二隻の小艇は相前後してアンコーナに向つた。數十の島々の間を縫うてクッルナローロの水路を南下する中に、東の空にはほのぼのと曙の色が近づいた。水平線上が明るくなるにつれて、水面が暗くなる。二筋の白い線が曉の闇の底に長い。午前三時二十分、艇がプレムダの近くサンセーゴ島の南方にさしかゝつた時、鋭いリッツオ艇長の目には、遙かな

凝視

超弩級
テウドキフ。

地平線上一點の黒煙を認めた。「すは！」と見つめてゐる中に見るく、黒煙は二つとなり、三つ、五つ、八つ、十、……幾筋も幾筋も林の如く地平線上に現れた。船だ。夥しい船だ。リッツオ艇長は雙眼鏡を取つて、徐にその商船なりや軍艦なりや、その大きさ、隊形等を凝視した。軍艦である。正しく軍艦である。しかも超弩級の巨艦二隻を中に擁して、その周囲を十隻の驅逐艦が取巻いて進んで来る。中の戦艦は、その著



砲塔
ハウタフ。

奥洪帝國
舊奧地利洪牙利帝國。

ビリーブスーウニ
チス

Viribus Unitis

五月十四日
一九一八年。

ペレグリーニ

Mario Pelle-
grini

ポーラ

Pola イスト
リヤ半島の港。

しく後方に傾斜した煙突と、どつしりした砲塔の恰好から推して、疑もなく奥洪帝國の海軍の重鎮たるビリーブスーウニチス號型だ。二萬噸の巨艦が前と後とに山の動くがごとく進んで来る。之を擁護する驅逐艦十隻は、前に一隻、後に一隻、左側に四隻、右側に四隻。その間各、約三百米。都合十二隻の巨怪が、堂々たる隊形を整へて南下して来る。

去んぬる五月十四日、大膽にも、伊太利のペレグリーニ少佐は、二名の水兵を率ゐて、敵の根據地ポーラ港に突入し、ビリーブスーウニチス號型、二萬噸の巨艦に肉薄した。一同は敵圍を突破して歸ることが出来ずに、遂に皆捕虜となつた。敵の海軍はこれに懲りて、ポーラ港の不安を憂へて、南方

セベニコ
Sebenico アド
リヤ海に面し、
舊奥洪帝國の中
央部にある港。
カッタロ
Cattaro 舊奥洪
國南端の港。

セベニコ又はカッタロの地に安全の根據地を求めんがために、夜に乗じて密かに南下するのであらうか。それとも更に南下して土耳其の海軍と合して共同の作業につくためであらうか。但しは又伊太利の沿岸を攻撃するためであらうか。何れにしても油斷のならぬ大敵だ。

しかし、とても數に於て敵ではない。こちらは一隻にやうやう七人を乗せ得る小さな自動艇が二隻。總勢十人で、何千倍の噸數、人數を有する大艦隊に對抗して戦ふことは、到底不可能の事だ。一打にして打潰されるのは火を見るより明かだ。そんな危険を冒さずとも、敵艦を見て之を直ちにアンコーナに報告しても務は濟む。敵に見つ

箴言
シンゲン。いま
しめのことば。

からぬやうに密かに根據地に歸るのが當然であらう。
しかし、それはリッツオ艇長のなし得ない處だ。彼の平
常の箴言は、「進撃せよ。常に進撃せよ。危険を意ともせず
して、最も強く最も大なるものに進撃せよ。」といふのである。
彼は稻妻の如く決心した、僅か十四人を乗せた二つの靱殻
を以て、堂々たる敵の大艦隊に向つて突撃しよう。

リッツオ少佐は雙眼鏡をおろして、後方につゞくアオン
ツオ少尉に信號した。

「見たか。」

するとアオンツオ少尉が信號を返した。

「分つた。」

黙解
モクカイ。

それだけである。何と痛快ではないか。
こんな痛快極まる信號が又とあらうか。兩艇は更に一



リッツオ

語をも交さず、互に大事を黙
解して、眞一文字に敵の大艦
列に向つて突進した。

リッツオ艇長は出來得る
限り速力を減ずるやうに命
令した。それは高速度で走
ると、自動艇が海上に残す長い白波によつて、敵の艦隊に氣
づかれる恐があるからである。

二隻の渺たる自動艇は、殆ど波の間に隠れてしまふやう

に小さい。彼等は徐々として北上して、彼方から南下して來る敵艦隊の右側面に近寄つた。

冷靜なりッツオ艇長は靜かにその突くべき處を考へた。中央の二隻の巨艦は十隻の驅逐艦に犇々と取りまかれてゐるから、とても近寄れさうにもない。よし、では周圍の驅逐艦の二三隻を撃沈して歸らうか。それでも決して無駄骨ではない。然しながら、それはリッツオ艇長の主義に反する。「危険を意とせずして、最も強く最も大なるものを進撃せよ。」との彼の主義が許さない。是非、萬難を冒しても、犇と取りまいた此の驅逐艦の艦列を突破して、中央の巨怪にぶつゝからねばならぬのである。

犇々
ヒシヒシ。

無駄骨

勇士の決意は鐵のやうである。

リッツオ少佐の指揮する自動艇は、右側第二と第三との驅逐艦の間を突破して第一の巨艦を、アオンツオ少尉は同じく第三と第四との驅逐艦の間を突破して、第二の巨艦を襲撃することに決した。

アドリヤ海がほのくくと明けかゝる。海は穩かに、二十四條の黒い煙が林のやうに立つてゐる。淡い靄が海の面を練絹のやうに包んでゐる。各驅逐艦の間は、その距離三百米に過ぎぬ。見つかつたらそれぎりだ。極度に速力を緩めた二つの木の葉舟は音をも立てず、夢の奥にひらめく鳥影のやうに、するくくと敵艦の間をすり抜けて、大艦列の

靄
モヤ。

眞中にもぐり込んだ。十二隻の敵艦に附けられた數十の哨兵が、誰一人この黒い「死の鳥」の影が彼等の懐にもぐり込んだのに氣づかなかつた。

自動艇からの魚形水雷發射は、極めて困難である。艇は非常に小さい。僅か五六人の人を乗せるのもやう／＼な位。無論發射管はない。二個の魚雷を舷側に鎖で括りつけて、鈎でぶら下げて持つてゐる。それを發射するには、その鈎を外して海中に落すと、魚雷は一杯に詰められた壓搾空氣の力で走り出す。だから發射する時に、自由にその狙を定める事は出来ない。艇その物を目標の方に向けて、魚雷の方向が丁度目標に向つた刹那に鈎を外さねばならぬ

發射管

ハッシヤクワ
ン。魚形水雷發
射管。

鈎

カギ。

刹那

セツナ。

ゴーリ
Armando Gori

ので、非常に冷靜沈著な人であつて初めてその効果を收め得るのである。

リツツオ艇長は舵手長ゴーリに命じて、艇をずん／＼と巨艦の右舷間近に進めさせた。その距離今や僅かに百五十米。二萬噸の超弩級艦は、山の如く鼻先に聳えてゐる。

「よし今だ。」

先づ右舷の魚雷を飛ばした。その瞬間、軽い自動艇が武者顫ひするやうに一揺れ揺れる。リツツオは更に左舷に飛んで行つて、左方の魚雷を水中に放つた。

「よし、やつた！全速力！後退！」

艇は忽ち眞白に波を切つて去る。彼は今一度死を賭し

轟然
グラウゼン。大
砲・雷鳴などの
ごろ／＼とどろ
くさま。

阿鼻叫喚
アビケウクラ
ン。阿鼻地獄・叫
喚地獄。阿鼻地
獄は、人間世界
で悪行をした者
の死後に生れて
苦痛をうくると
ころ。叫喚地獄
は、諸の罪人
が苦痛に堪へず
して號泣・叫喚
するところ。何
れも非常なる苦
痛に堪へず、わ
めき叫ぶさまに
いへり。

て敵の艦列を突破せねばならぬ。

彼の自動艇が第一の巨艦の右舷から離れると、すぐに轟然たる二つの爆音が静かなアドリヤ海の曙の靄を劈いた。第一の魚雷は第一第二の煙突の中間の下方に、第二の魚雷は艦尾の砲塔の下方に命中したのだ。物凄い爆發と共に、忽ち眞黒い煙が空に聳え立つて、その中から赤い焰の舌がめら／＼と渦巻き上がる。阿鼻叫喚、一時に艦内から數千の叫聲があがる。死の苦惱の如くに、汽笛が長く／＼悲鳴する。この刹那、忽ち又第二の巨艦の中腹に、第三の爆發があがつた。アオンツオ少尉もまんまと艦列を突破して、第二の巨艦の右舷に迫り、一個の魚雷を放つたのが命中した

のだ。

この瞬間の敵の混亂を想像して見よ。

そもや何處から來た。どうして來た。全體何が來た。十隻の驅逐艦に犇々と護られてゐる巨艦が、二艦ともかくの如く襲撃をうけようとは！

敵は大擾亂。各艦から響く非常の汽笛。乗組員の騷擾。二艦の急を救ふもの。大膽不敵な伊太利の小艇をおつとり圍んで、砲火を浴びせるもの……。

リツツオの艇は、忽ち敵の三驅逐艦に見つけられた。彼等は狂ひ立つてリツツオの艇を追ふ。速力に於て、自動艇はとても驅逐艦に及ばない。その大きさに於ては霄壤の

擾亂

霄壤の差
セウジヤウの
サ。天と地との
隔る如く大差あ
ること。

速射砲
發射速度のはや
き砲。

差がある。彼はあらゆる武器を備へてゐるのに、こちらはステツキ位の速射砲一つを載せてゐるだけ。乗組は總員僅かに七人だ。距離は見る間にずん／＼近くなる。一番近い敵の驅逐艦が眞白に波を蹴立て、突進して來る勢ひの物凄さよ。どん／＼と浴びせかけられる砲彈が、艇の四方に數丈の水柱を立てる。

萬事休す。逃れるにはその速力がない。戦ふにはその武器がない。進んで衝突しても、靱殻同様の自動艇は、忽ち微塵に摧かれるばかりだ。何としよう。リツツオの果斷はこゝにある。リツツオの沈著はこゝにある。リツツオの豪勇はこゝにある。

微塵
微細なるもの。
摧く
クダク。

「速力を緩めよ。」

命令を聞いて、ゴトリ舵手長は驚いた。

「大丈夫ですか。」

彼は自分の耳の間違ひか、少佐の口の言違ひだと思つたのだ。

「上官の命令だ。」

艇長は獅子の如く吼えた。一同は少佐が發狂したものと思つた。無理もない事だ。敵艦三隻は「得たりや」とばかり狂ひに狂つて、慕進して來る。その間僅かに百米！

リツツオは莞爾として薄紅の曙の中に微笑んだ。

自動艇は潜水艇と戦ふために二三個の爆彈を積んで居

莞爾
クワソジ。微笑
する貌。

慕進

周章狼狽
シウシヤウラウ
バイ。あわてさ
わぐこと。
僚艦
レウカン。

る。これは潜水艇の前路に廻つて水中に投下するものだ。リッツオは爆弾の一つを擁して冷やかに敵の近寄るのを待つてゐた。そして敵艦が手も届くばかり近づいた時、彼は爆弾を船尾の白波の中に放つた。敵艦はそれとも知らず眞一文字に突進して來た。忽ち起る爆弾の轟き！驅逐艦の船尾は大破損を起して、見る／＼中に傾いてしまふ。追撃して來た他の二艦も、友の危急に心を奪はれて周章狼狽、今や沈没せんとする僚艦の兩側に走つた、リッツオの艇を見棄てゝ。

「萬歳！もう大丈夫！全速力！」

リッツオの小艇は波を切つて、目ざすや曙のアンコーナ

の港へ。

それにしても、心がかりはアオンツオ少尉の艇だ。無事に敵圍を逃れたかどうか……一同が心を碎いて彼方の海を見つめてゐると、遙かに白波を擧げて突進して來る一葉舟がある。正しくアオンツオの艦だ。

彼方から……此方から……狂喜して伊太利萬歳を叫んだ。歡極まつて十有四人は皆泣いた。地平線上に黒煙を見てから、二艇の再び此處に相會するまでが丁度二十分間。霧紫に夜は明けて、三色旗が朝風に翻る。海はまだ眠るか、小波もない。

リッツオが二つの魚雷を盪して、瞬時にして沈めてしま

三色旗
サンシヨクキ。
伊太利王國の國
旗のこと。
盪す
ハナムケす。

聖ステファノ
S. Stefano

テゲトフ
Tegheoff

斃す
タフす。

つたのは、奥國海軍の覇者ビリブス、ウニチス號型の聖ステファノ號であつた。聖ステファノ號は、無數の犠牲と共に即時に沈んでしまつた。他の超弩級艦、テゲトフ號も、大損傷をうけたまゝ、曳船せられて出發地點のポトラ軍港に入つた。爆彈を喰つた敵の驅逐艦は、大破損のまゝ、二驅逐艦の間に狭まれつゝ、曳船せられて去つた。

かくて蠅の如き二小艇は、象の如き二巨艦を斃した。六月十日の早朝、アンコーナの港内に二自動艇は揚々として引きあげて來た。總員十四人、たゞの一人として微傷を負うたものすらない。一同の意氣は天を衝くの概がある。

一行は忽ち、知人や市民に、十重二十重と取圍まれた。その時のリッツォ艇長の語がゆかしい。たつた一言である。「夢のやうです。」

そしてすぐ郵便局に行つて、まづ第一に故郷の老母に電報を打つた。

その日正午少し前、ミラツツォにある母の手に一通の至急電報が著いた。胸を轟かして開いて見た母は、その電文の内容によつて、更にく驚かされた。中には、たつた一語、「嬉しくてたまらぬ」とあるばかり。

市民の祝賀會に招かれても、上下兩院、各大臣、その他無數の公私の團體から祝電や祝文をうけても、謙讓寡言な少佐

寡言
クワゲン。

ミラツツォ
Milazzo
シチリヤ島の港。

は、
 「祖國のために盡すべき、私の神聖な義務の萬分の一を盡したに過ぎません。」
 と繰返すばかりであつた。
 (下位春吉—大戦中のイタリヤ)

大丈夫は、一向剛操を立て、其の風俗いやしかるべきに似たり。これ又大丈夫の本意にあらざるなり。されば、月至、梧桐上、風來、楊柳邊、大丈夫不可無此風流といへるは、風度の、世俗にあらざ、明珠の側に在りて自然に人を照らすが如き風情をいへり。
 (山鹿素行—士道)

一〇 故郷の松

弘淨寺
 愛知縣海部郡津島町。
 雪舟
 室町時代の畫家。水墨の畫に長ず。永正三年歿。年八十七。(二〇八〇—二一六六)

淋漓
 リンリ。ぼたぼたと、たれおつるさま。
 淨土宗
 佛教の一派。承安の頃、僧源空の創めたるものにして、専ら念佛を修して極樂往生するを主旨とす。
 雄渾
 ニウコン。強くして淀みなきこと。

私の少年の追憶は、弘淨寺の松の木で始まる。松は、雪舟が墨色淋漓と描いた雄松のやうに、天へ昇らうとして地上との離別を惜しむ植物界の大蛇だ。
 弘淨寺は、私の郷里にある淨土宗の寺である。詳しくいふと、郷里の家の二階に大きな丸窓があつて、外を覗くと右手に見える寺である。然し私の追憶に問題となるのは、この寺の屋根でない、この寺の墓場の隅に小さく埋まつてゐる私の妹でない、この寺の奥にある稻荷の社でない、また庭の池へ水を飲みに出る狐でない。幾百年たつても雄渾の

睥睨
ヘイゲイ。

本堂
本尊を安置せる
佛堂。

氣魄を失はずに周圍を睥睨する松の木が、天氣の良い日には、箒目綺麗に掃除された本堂前の廣場へ黒い影を投げるので、この寺が私の追憶の最初の頁を塞ぐのである。この

寺が、寧ろこの大きな松の木が、少年時代に於ける私の遊び友達であつた。



弘淨寺の松

私の少年時代の追憶には、梅樹が無い、櫻花がない、霧のやうに煙る晩春の柳が無い、又瀟洒な立姿の水仙が無い。私は少年の時、大地の生氣が一本の樹木と化したと思はれる此の松の木から、所謂男性美の影響を受けた事を喜ぶも

瀟洒
セウシャ。きつ
ぱりとして、き
よらかなること。

婉麗

エンレイ。しと
やかにして、う
るはしきこと。

酒井抱一

江戸時代の畫家。
應舉、光琳の畫
風を學ぶ。文政
十一年歿。年六
十八。(二四二一
—二四八八)

探幽

江戸時代の、狩
野派の畫家。狩
野家中興の祖。
延寶二年歿。年
七十三。(二二六
—二三三四)

のである。私は此の弘淨寺の松の木を遊び友達としたと
いつたが、実際には、私はその木を恐れたのである。一種の
恐怖心を以てその木に接したのである。松には、雲雨を得
て天に昇る大蛇のやうな龜裂の入つた甲羅の皮膚があり、
觸れると手を刺す針のやうな松葉がある。松には、人に婉
麗の感をそゝる何物もない。弘淨寺の松の木に關する私
の追憶には、群青金泥の酒井抱一の松でなく、毅然として百
難に堪へる雄姿が、紙上で風雨を呼ぶ雪舟探幽の松である。

私に語らねばならない追憶が多い。
煮え返るやうに熱い夏の日が續く。田地田畑に稻や麥
が脣を潤し、根を濕すに足る一滴の水もない。地面は破れ

牛頭天王
ゴツテンワウ。
祇園精舎の守護
神。牛頭天王の
御社は愛知縣
海部郡津島町に
ある津島神社な
らん。

沛然
ハイゼン。盛大
なるさまにい
ふ。

始め、樹木は萎れかける。日中は蟬が、雨か霰のやうに雨乞の歌を地上に降らす。夜分になると、家の前を雨乞の百姓が鐘や太鼓を叩いて、牛頭天王の御社へと急ぐ。物凄いほど眞暗な御社には、雨乞の百姓を迎へるため、提燈がともし、篝火が焚いてある。御社の神主の家の座敷へ、昔から靈驗あらたかといはれてゐる探幽の瀑布の畫が出されてから、もう十日以上になる。沛然たる雨を呼ぶ筈の「探幽の瀑布」は、魔力を失つたのであらうか。

十五日の満願の朝早くから無言の祈禱を歌つてゐる巨人がある。外でない、弘浄寺の松の木である。間もなく天は曇り始め、強い風が吹きだす。否、それは雨を祈る松の木

傲然
ガウゼン

叱咤
シツタ。しかり
つける。

蹙蹙
アイタイ。

が吐きだす龍の唸り聲であらう。松の木の祈禱は答へられた。恐ろしく大粒の雨が落始め、半時間もたゝない中に豪雨となつた。人間の歡喜以上に喜ぶのは、弘浄寺の松の木である。誰か私の外に、篠突く雨を全身に浴びつゝ、傲然として立つ此の松の偉觀壯觀を見たものがあるであらうか。此の松の木の態度は、百倍の勇氣を振ひ起して三軍を叱咤する猛將軍のそれであつた。

私は弘浄寺の松を單に樹木とは思へなかつた。……面を拂ふ春風に乗つて、一つの白い蝶々がこの松にとまつた時、私はその温顔に平和の微笑があることを知つた。私は蹙蹙たる霞の春の日に、此の松の木が奏でる午後の催眠歌を

綿帽子
眞綿を摘みひろ
げてつくりたる
帽子。



木魚

聞いた。そして此の松が雪の朝に、ぼつてりと大きな綿帽子を被り、その綿帽子が太陽の光線を受けて金剛石のやうな光を放つた時の光景はどうだ。私は朝念佛を聞いて起き、夜念佛を聞いて床に就いた。毎朝早く鐘の聲が弘浄寺から響いた時、私は私の尊敬するあの松の木の音であるやうに感ぜざるを得なかつた。夕景になつて木魚の音が聞えて來た時、私は私の畏敬するあの松の木の聲であるやうに感ぜざるを得なかつた。

(野口米次郎「松の木の日本」)

をさなきは松山道のめづらしく拾ひし松かさを
手より放たず

一一 短夜の頃

毎日よく降つた。もはや梅雨明けの季節が來てゐる。町を呼んで通る竿竹賣の聲がするの、この季節にふさはしい。蠶豆賣の來る頃は既に過ぎ去り、青梅を賣りに來るにも稍遅く、涼しい朝顔の呼聲を聞きつけるにはまだ少し早く、今は青い唐辛の荷を擔いだ男が來始める頃だ。住めば都とやら、山家生れの私などには、さうでもない。寧ろ住めば田舎といふ氣がして來る。實際、この界限に見つけるものは都會の中の田舎であるが、でもさすがに町の中らしく、朝晩に呼んで來る物賣の聲は絶えない。どれ、そろそ

蠶豆

ソラマメ。莢科
蠶豆屬の二年生
草本。



唐辛

タウガラシ。茄
科蕃椒屬の一年
生草本。

界限

カイワイ。あた
りきんじよ。

蚊帳黨

ろ蚊帳でも取出さうか。これはまだ梅雨の明けない時分のこと、五月時分からもう蚊帳を釣つて居ると言つてよこした人への返事に、わざと書いて送らうと思つた私の戯れだ。せいよく一月か一月半位しかその必要もない此の町中では、蚊帳を釣るのは寧ろ樂みな位である。蚊帳の内に螢を放して遊ぶことを知つてゐた昔の俳人などは、確かに蚊帳黨の一人であつたらう。それほど物ずきな心は持たないまでも、寝冷えする心配も割合に少ないところに足を延ばして、思ふさま長くなつた氣持は何とも言はれない。枕に近く、髪に届く蚊帳の感觸も身にしみる心地がする。蚊帳は内から見たばかりでなく、外から見た感じも好い。

内に紛れ込んだ蚊を焼くと言つて、あちこち持ち廻る蠟燭の火を、青い蚊帳越しに外から眺めるなども、夏の夜でなければ見られない趣だ。

古くても好いものは簾だ。よく保存された古い簾には、新しいものにはない味がある。簾は二重にかけて見ても面白い。一つの簾を通して、他の簾に映る物の象を透かして見る時など、殊に深い感じがする。

團扇ばかりは新しい物に限る。此の節の東京の團扇は粗製に流れて來たから、一夏の間の使用にすら耐へないのがある。圓い竹の柄で、全部の骨が一つの竹から分れて行つてゐるやうな丈夫なものは、あまり見當らなくなつた。

團扇
ウチハ。

世相
セサウ。世のあ
りさま。

扇子にもまして、もつと一時的で、移り行く人の嗜好や世相の奥までも語つて見せてゐるものは團扇だらうか。形も好ましく、見た眼も涼しく、好い風の來るのを選び當てた時は嬉しい。それを中元のしるしにと言つて、訪ねて來る客などから貰ひ受けた時も嬉しい。

此の節の素足の心地よさ。尤も、袷から單衣になり、シャツから晒木綿の襦袢になり、だん／＼いろ／＼なものを脱いだ後で、私達は此の節の素足にまで辿り著く。私は人間の體の中で一番足が眼につくと言つた足袋屋のあることを知つてゐる。それほど職業的な意味からでなく見ても、足の持つ性格の多種多様なには驚かされる。素足の表

晒木綿
サランモメン。
さらしたる木
綿。

生氣

情ほど、また夏の夜の生氣をよく發揮するものはあるまい。この短夜の頃が私の心を惹くのは、一つは黄昏時の長いにもよる。あの一年のうちの半分が晝で、半分はまだ夜であるやうな北の國の果を想像しなймаでも、黄昏と夜明けのかなり接近して、午後の七時半過ぎにならなければ暗くならない夜が、朝の三時半過ぎか四時近くには明け放れて行くと考へることは楽しい。まだ私達が眠りから醒めないで、半分夢を見てゐる間に、そこいらはまう明るくなつてゐると考へることも楽しい。

短夜の頃の深さは、こゝに盡すべくもない。そこにはまた、私の好きな淡い夏の月も待つてゐる。夏の月の好いこ

とは、それが餘りに輝き過ぎないことだ。

露に濡れた芭蕉の葉から、涼しい朝の雫の滴り落ちるやうな時もやつて来た。あの雫も、此の頃の季節の感じを特別なものにする。あれを見ると、眞に眼の覺めるやうな心地がする。長い梅雨の續いた時分には、私はよく庭の芭蕉の見える所へ行つて、あの嫩い夢でも湛へたやうな、灰色がかつた青い卷葉が開いて行くさまなどを、ぢつと眺めながら、多くの時を送つたこともあつた。(島崎藤村―市井にありて)

新麥一斗、たかなな三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と廻向いたし候。
(日蓮)

一二 旅 と 歌

旅行の樂みは想像したゞけでも人の心を惹きつけてしまふ。殊に、益々複雑繁多になつて行く大都會の生活に浸つてゐる人々にとつては、旅行はこの上ない慰めである。心を本當に落ちつかせることのない實生活から逃れ出て、自然の中へ入込めば、それだけで、まう人の心は、新鮮な刺戟に蘇つてくるのを感じるであらう。この潑刺とした蘇生を味はふだけでも、旅行は十分喜ばれる價值をもつてゐる。ましてそこには、未知のものを始めて探る喜や、自分だけの氣持を樂々と味はふことの出来る心安さも加はつてゐる。

潑刺
ハツラツ。

いとほしむ
いとほしく思
ふ。

草枕

かれいひ
乾飯。

その上、史蹟や名所、珍奇な風俗や言語等が、遠く家を離れて旅に出たといふ感じを深くすれば、人の心は自ら曇りなく、浄められて、素直な氣持で、目に觸れ、耳に聞く所のものをいとほしむのである。それについても、昔の旅を今でも想像させる「草枕」といふ言葉が、すぐに心に浮んで来る。今こそ交通機關と旅宿とが發達したけれども、徒歩か馬の背でしか旅する事の出來なかつた昔の旅行では、かれいひを準備したり、或は萱を刈敷いて、露けき假寢をするなどといふことも、歌の言



筆重廣藤安 波の野佐

能因

俗姓橋永愷。平安朝時代の歌人。

宗祇

俗姓飯尾氏。室町時代の連歌師。

文龜二年歿。年八十二。(1471-1554)

芭蕉

姓は松尾氏。伊賀國(三重縣)の俳人。元祿七年歿。年五十一。

(1644-1730)

秀衡

藤原氏、基衡の子。陸奥(青森縣)の豪族。文

治三年(一八四七)歿。

葉の上での遊戯でなく、本當にあつたのである。それにもかゝらず、昔から旅を喜び、旅にあこがれた人たちは、古今東西に渡つて極めて數多い。日本だけに限つて見ても、まだ交通も十分に開けなかつた萬葉集の時代の歌には、旅の感想をうたつたものが澤山ある。能因も旅をしたし、西行も旅をした。宗祇や芭蕉は旅から離せない因縁になつてゐる。西行が夏に畿内を發足し、鎌倉を通つて秀衡の屋敷に著いた時には、いつ我が舊宅へ歸るといふあてはなかつた。そんなにしてまで、昔の人が不便な旅を忘れ難くなつた。そんなにあこがれの心は、今の都會生活を送る人には、一層捨てがたく、はつきりと理解する事が出來るであらう。

たとへば夏の休に、高山や海邊を旅するなどは最もよい。さうでなくて、所用の爲にする旅行でも、一時間ばかり汽車に揺られれば、まうすつかり旅行気分になつてしまふ。その時の心の持ち方一つでは、所用の爲の旅行でも、それに深い意味を持たせて、つくづくと旅情のこまやかさを感じる事も出来る。急ぎの用でないならば、途中下車をして、沿線から數里の所迄外れて見るのも面白い。交通の開けた今の日本では、鐵道から數十里も離れた場所などは、さうあるものではない。それに以前は、がた馬車の喇叭の響いた街道にも、驛馬の鈴の音が木の間を洩れた峠路にも、自動車の便がある。三十分も揺られると、都會の人が想像だもした

がた馬車



雲の日りの海

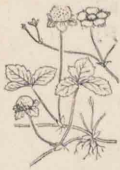
明澄透徹
くもりなくすき
とほる。
ときほごす

岬角
カフカク。みさ
き。

い昔の姿そのまゝの岬や、山や、峡谷や、丘陵やに連れていつ
てくれる。忙しい生活の中で感じもしなかつた森巖壯麗
な景色や、明澄透徹の感想が、不思議にひた〜と心に迫り、
心はまた不思議にときほごされて、自然の中に流れて行く
のを覚えるであらう。

この心持は、旅に親しむもののみが恵まれた特権である
と思ふ。實際、丘陵性の半島を自動車で横ぎるなどは面白
い。夕映のかゞやかしい夏の午後、白い鷗ときそひつゝ發
動機船の岬角をめぐるのも面白い。眞夏溪谷を旅するの
もよいし、秋の密林を露にぬれつゝ峠越しするのも楽しい
ものである。夏に疲れた草が静かに眠つて、薄のま新しい

蛇苺
（ペイチゴ。薔
薇科。へびいち
ご屬の多年生草
本。



穂が白く見える丘や、蛇苺の赤い初夏の土手の樹蔭で、蝮取りの笛を聞くと、夢のやうな世界が胸にうかんでくる。旅は心の故里へ人を誘つて行く。而して、人の心を不思議なほど解きほごして、子供にし、感じやすくする。旅に浄められた人の心は、皆ひとかどの歌人の心になつてゐる。歌よむ人は平素にもまして、すなほな純情の歌をよむ事が出来、歌をよまぬ人の心も、歌よまゝほしい子供心にかへつて來るのである。

そこで歌よむ人は、旅の途上の感懷を一首の短かい歌に托して、永遠の記念碑をこゝかしこに建てゝくる。それは尊い道標であり、これを建てる喜は、人生に於ける最大の喜

鑑賞
書畫其の他藝術
上の作品を鑑識
し、賞美するこ
と。

の一つである。鑑賞も出来、創作力もある人は、自分からして、荒れた曠野にも、雲ある峰にも、心の記念碑を建てゝ行く。たとへ創作をしない人でも、旅に心を休めるほどの趣味と、鑑賞力とのある人ならば、自分が今辿りつゝある山や、林や、海岸について、我が心に訴へるやうな名作の存する時は、それに育まれて、一人の喜を感じる事も出来るであらう。

旅は人の心を浄め、人をおしなべて詩人としてくれる。であるから、歌よむ人は一層歌人となり、歌よまぬ人も、歌よまゝほしいまでに純な心持にさせられるのである。

一三 草 枕

賀 茂 眞 淵

富士の嶺のふもとをいでてゆく雲は足柄山の峰にかゝれり

播磨瀨瀬戸の入日のすゑはれて空よりかへる沖のつり船

上 田 秋 成

やどりする宇治の橋もとさ夜ふけてかはの中洲に鳴くは千鳥か

みぞれふり夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人の音もせぬ

播磨瀨
兵庫縣に在り。

上田秋成

國學者。歌文を能くす。大阪の人。文化六年歿。年七十八。(三三九—三四九)

宇治の橋

山城國宇治川に架せる橋。今京都府久世郡宇治町に屬す。

有馬山

兵庫縣有馬郡。有馬温泉は有馬郡有馬町にあり。

香川景樹

歌人。天保十四年歿。年七十六。(二四八—二五〇)

浮島が原

静岡縣愛鷹山の南麓に在る浮島沼附近の原野。

明石瀉

兵庫縣にあり。

橘曙覽

歌人。井手氏。明治元年歿。年五十七。(二四七—二五六)

大隈言道

歌人。明治元年歿。年七十一。(二四七—二五二)

香 川 景 樹

富士の嶺を木の間木の間にかへり見て松の蔭ふむ
浮島が原

明石瀉松の木蔭に道はあれど磯づたひしてわかめ
拾はむ

橘 曙 覽

旅ごろもうべこそ互ゆれ乗る駒の鞍のみ嶽にみ雪
つもれり

大 隈 言 道

漕ぐまゝに夜あけて見れば見知りたる昨日の船に
又ならびけり

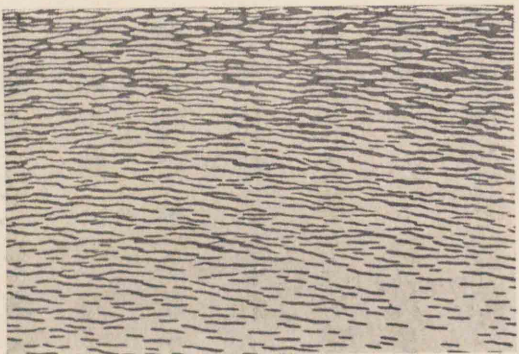
一四 波と船唄

諧謔
カイギヤク。お
どけ。

蛇紋石
ジヤモンセキ。
鐵石の一種。綠
又は黃色にして
白色の斑紋有
り。蛇皮に似た

一條の微かな波の高まりがあるかなきかのやうに、水平線のほとりから離れて来て、だん／＼と色は濃く、形は明かになつて——人に擬していふならば、或る諧謔を思ひついた人が、遠くから話相手と目指す人に笑ひながら近づくやうに——この波の高まりもかくて渚に近寄り、遂に笑の破裂するやうに「ざ、／＼、／＼、／＼……」と、騒がしく黒くさゝやき、その沸騰せる波面は「ざつくるん——」と、長く引いて碎ける。それから水はみがかれた蛇紋石のやうな滑らかな渚をすべり、「ざ、ざあ——るろ、／＼、／＼、／＼——」と、いふやうな優しい、しかし

彈性



福田平八郎筆

彈性の抵抗ある音と言葉を立てながら、またしづかに「すら、すら、／＼、／＼」と引いて行くのである。もうその時は第二の波が高まつて、既に波頭が散りはじめた時であつた。——かうして波は飽かず優しいいたづらを續ける。その引いて行く波の一筋その泡の一つ一つにまで、折しも西山に近づいた夕日の影が斜に當つて石鹼玉の色のやうな美しい夢の模様を現す。

挿話
サツソ。
葛藤
事のもつれ。

かくの如き波の主なる運動の間に、また長い小説の挿話に比ぶべき小さい葛藤がある。殊に、渚を引く波の歸るも

のと、往くものとの間には、蟻の行列にでも見るやうな軽い
挨拶、優しいいたはりがある。

静かに、心を鎮めて、この波のなす
曲節を聴いてみると、かの漁夫の集
會の時に歌ふ船唄の調子を思ひ出
さずにはゐられなかつた。波がこ
れを生んだといつては餘りに牽強
であるかもしれぬ。しかし海や
波の曲節と、此の唄の調子との間に、
深い關係のないといふことは全く
考へられない。その唄のゆるやかに流れてゆく時、突然音



渚

牽強
理にあはぬを強
ひて理にあふや
うにいひ紛らは
すこと。

音頭を取る

頭を取る人の高い變調に驚かされる事がある。それは突
然大きい波が碎けた時の心持によく似てゐる。またその
唄の中に、高い問答のやうな調子の長く續くところのある
は、濱邊の聲高の生活が、静かな夕波の曲節を崩すのによく
似てゐるのである。

(木下奎太郎「地下一尺集」)

高砂や此の浦舟に帆をあげて、此の浦舟に帆をあげて、月も
ろともに出で汐の、波の淡路の島蔭や、遠く鳴尾の沖すぎて、は
や住の江につきにけり、はや住の江につきにけり。(謡曲「高砂」)

木下奎太郎
本名は太田正
雄。醫學博士。文
學者。東北帝國
大學醫學部教
授。靜岡縣の人。
明治十八年生。

一五 小園の記

小園
東京市下谷區上
根岸町。
場末
町はづれ。

物めかす
物々しく取りな
す。
老嫗
ラウオウ。
金州
關東州に在る都
邑。金州灣に臨
む。

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家疎に建てられたれば、青空庭の外に擴りて、雲行き、鳥翔る様もいとゆたかに眺めらる。初めて此處に移りし頃は、僅かに竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を植ゑて、稍物めかしたるに、隣の老嫗の與へたる薔薇の苗さへ植添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるゝことも多かりき。

一年軍に従ひて金州に渡りしが、其の歸途病を得て、須磨

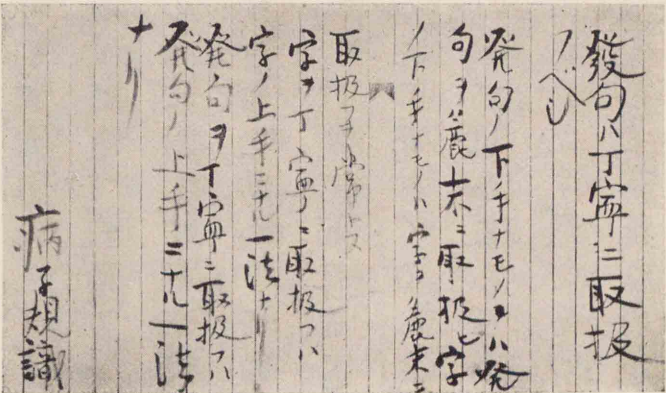
須磨
兵庫縣神戸市。
故郷
愛媛縣松山市。
さび
古びて趣あるこ
と。

三逕就_レ荒_ニ
逕は小徑なり。
陶淵明の歸去
來辭に、「三逕就
_レ荒、松菊猶存_レ」
とあるによる。

に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を経て家に歸り著きし時は、秋將に暮れんとする頃なり。庭の面、去年よりは遙かにさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲亂れたる、此の景に對して靜かに昨日を思へば、萬感そゞろに胸に迫り、辛き命を助かりて歸りし身の衰は、たゞ此の嬉しさに紛れて、思はず「三逕就_レ荒」と口ずさむも涙がちなり。ありふれたる此の花、狭くるしき此の庭が、斯くまで人を感じしめんとは、曾て思ひよらざりき。まして此より後、病いよく、募りて足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は余が天地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、此の十歩

芳葩
ハウハ。

の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。



刈株、寸ばかりの緑をふいて、逞しき勢ひは秋の色も思はる。

次の年、春暖漸く催して、鳥の聲
いとうらゝかに聞えしある日、病
の窓を開きて、端近くにじり出で、
讀書に勞れたる目を遊ばすに、い
きいきとしたる草木の生氣は、手
のひら程の中にも動き、まだ薄
寒き風のひやくと病衣の隙を
侵すも、いと心地よく覺ゆ。これ
も隣の姫より貰ひしといふ萩の

寸ばかりの緑

眞晝過より、夕陽椎の樹に落つるまで、何を見ることもなく、
酔うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮す
ことさへ多かり。

今まで病と寒氣とに惱まされて、弱り盡したる余は、此の
時新に生命を與へられたる小兒の如く、此より萩の芽と共に
に健全に育つべしとおもへり。折ふし黄なる蝶の飛來り
て、垣根に花をあさるを見ては、そゞろに我が魂の自ら動き
出でて、共に花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽
を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて隣の庭を打廻り、再
び舞戻りて、松の梢にひらく、水鉢の上にひらく、一吹き
風に吹きつれて、高く吹かれながら、向ひの屋根に隠れたる

惘然
マウゼン。

時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて、心地惱ましく、内に入り、障子たつると共に、蒲團引被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限無き原野の中にありて、今飛去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何處ともなく、數百の蝶の群來りて遊ぶを、つらく見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞上り飛行くに、我もおくれじと茨、葎の嫌ひなく踏みしだき、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢汗したゝかに襦袢を濕して、熱は三十九度にや上りけん。

げんくの花盛り過ぎて、時鳥の空に訪るゝ頃は、赤き薔

茨

イバラ。野薔薇の異名。薔薇科、薔薇屬の落葉灌木。

葎

ムグラ。茜草科の一年生又は二年生草本。

げんく

れんげ草のこと。紫雲英。

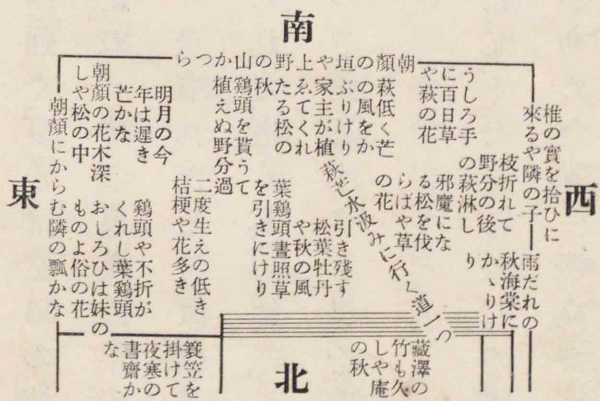
薔、白き薔薇咲満ちて、馨しき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見どころは、まこと萩薄の盛りにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢ひ強く、夏のはじめの枝振さへいたく蔓りて、末頼もしく見えぬ。葉の色も去年の稍、黄ばみたるには似ず、緑いと濃し。空晴れたる日は、椅子を其のほとりに据ゑさせ、人に扶けられて、漸く其の椅子にたどり著き、氣晴しがてら、萩の芽につきたる小さき蟲を取りしことも、一度二度にはあらず。

桔梗・撫子は實となり、朝顔は花の稍、少くなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり。飛立つばかりの嬉しさに、指を折りて、明日は四つ、明後日は八つ、十日

野分の風
野の草を吹き分
くる風の義に
て、秋季に吹く
疾風の稱。

のゝしる
聲高に騒ぐ。

目には千になるならんと思ひ設けし程こそあれ、ある夜野分の風烈しく吹出でぬ。安からぬ夢を結びて、あくる朝、日たけて眠より覺むれば、庭に何やら、のゝしる聲す。心もとなく這出でて、「何ぞ」と問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折れ萎れたるなりけり。ひたと胸潰れて、いかにせばやと思へど、せんなし。斯くと知りせば、枝に杖立て、置かましをなど悔ゆるも愚なりや。互吹飛ばしたる去年の野分にだに、かうはならざりしを、今年、の風は萩の



バケツ
Bucket

爲に方角や悪しかりけん。此の日は晴れわたり、稍、秋氣をおぼえ初めしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥とに水を湛へて、折れ残りたる萩の泥を洗ひたりしかど、空しく足の痛みを増したるばかりにて、泥附きし枝のさきは、蕾腐りて、終に花咲くことなかりき。園中何事もなきは、たゞ松と薄とのみ。

鷗外漁史
森林太郎の號。

葉鷄頭
莧科の一年生草
本。



去年の春、彼岸や、過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種、幾袋贈られしを、直ぐに播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鷄頭を欲しかりしを、いと口惜しく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはし、ものあり。去年葉鷄頭の種を埋めしあたりなれ

晝照草
松葉牡丹の異名。馬齒莧科に屬する一年生草本。

朝まだき
夜のまだあけきらぬ時、即ち早朝。
不折子
中村不折。名は鉦太郎。洋畫家。帝國美術院會員。長野縣の人。慶應二年生。

ば、必定それをめりと、竹を立て、大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくて四邊の晝照草など引きのけ、やうく尺餘になりし頃、野分荒れしかば、こればかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉鶏頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。瘦せてよろくとしながら、猶燃ゆるが如き紅しだれて、いと美し。二三日ありて、向ひの家より貰ひ來れりとて、肥太りたる鶏頭四本ばかり植添へたり。其の次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きな葉鶏頭一本引提げて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ手づから植ゑて去りぬ。鶏頭

うちくれる
くれる。

みまかる
死ぬ。

正岡子規
名は常規。俳人。愛媛縣の人。明治三十五年歿。年三十六。

葉鶏頭かゞやくばかり華やかなる秋に壓されて、萩ははや散りがちなるもあはれ深し。薔薇萩・薄・桔梗などをうちくれて、余が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、其の後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりしとぞ聞えし。

ごてくと草花植ゑし小庭かな

(正岡子規—子規全集)

三伏の日ざかりの暑さに堪へ難くて、

蟬あつし松きらばやとおもふまで

と口ずさびし日數も程なく立易りて、や、秋風に其の聲のへり行くほど、さすが哀れにおもひかへして、

死にのこれ一つばかりは秋の蟬

(横井也有一鶉衣)

フェアプレー
Fairplay 堂々
たる勝負
陶冶
タウヤ。養成す
ること。

一六 フェアプレーの精神

適當に指導された競技は、我等の徳性を涵養し、品性を陶冶する上に、非常に役立つものである。而して人々が遊技によつて、訓練される性質の中で、最も自然に、最も容易に修得し得るところのものはフェアプレーの精神である。

さて、フェアプレーの精神とは何を云ふかといふに、プレーに關する語を以て云ひ表すと、競技の際に、公正なる奮闘、堂々たるプレー、立派なる試合をするると云ふ精神である。

此の精神は、試合をする時に必要であることは勿論であるが、吾人が社會生活をする上に於ても、緊要缺くべからざる一つの徳である。

プレー
Play 遊戯。

フェア
Fair 公明

る一つの徳である。

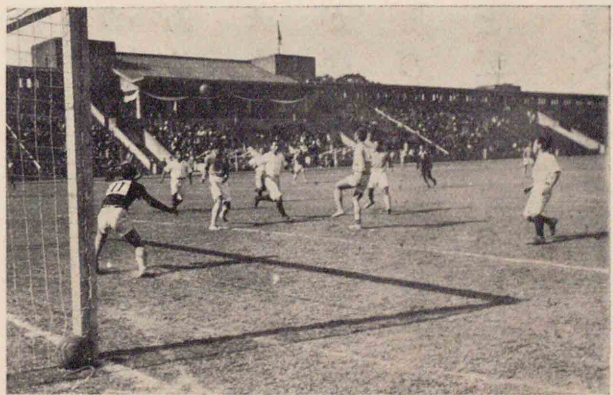
今日世の中に最も缺けてゐるのは、努力者の表す努力が足りない點でなくて、反つてフェアに努力する人の尠いことである。社會の人々の間にフェアプレーの精神が足りないために、お互にどれ程損をしてゐるか知れない。今日社會の紛争、國際間のトラブルの頻々として起るのは、之に關する人々に、フェアプレーの精神が缺けてゐるからである。されば人々の間にフェアプレーの精神を向上せしめることは、極めて肝要な事柄であると云はなければならぬ。

然るにフェアプレーの精神も、他の多くの徳目と同様に、

トラブル
Trouble 紛議

之を理解せしめ、更にこれに習慣づけることは困難なものであるが、獨り競技の際には、比較的容易にこの精神を養ふことが出来るのである。勿論競技によつて、簡單に此の精神を養成することが出来るといつても、競技を行ひさへすれば、此の精神が自ら會得されると云ふのではない。それは競技の正しく行はれた時に限るのである。

實際、競技によつてフェアな精神を養ふことも出来るし、同時にアンフェアな心持を養ふことも出来る。それはス



サッカー

アンフェア
Un-Fair
不公

スポーツ
Sports
運動競
技

ビール
Beer
麥酒

ポーツの性質によるのでなくて、實はその取扱ひ方如何によるのである。

試合の直接の目的は、勿論勝つことにある。世間には、試合の時に、勝負はどうでもよい、たゞやりさへすればよいやうに説く者もあるが、これはよくない。試合から勝負の精神を除いたならば、氣の抜けたビールのやうで、うま味も失せて、試合が單なる運動となつてしまふ懼がある。競争から勝負の精神を抜いたならば、それは競争でなくて駈歩になる。それでは興味も少く、心身の上に得る利益も尠くなる。されば試合の際には、全力をつくし、眞劍となつて闘はなければならぬ。勝たんとして努力しなければならぬ。

い。たゞ、茲に注意しなければならぬ點は、その際勝たんがために不正な手段をとつてはならないと云ふことである。堂々と正しく闘ふのでなければならぬ。世には勝りたいあまり、手段を選ばず、無理をしても勝たうとするやうな者が無いではないが、それは、明かによくないことである。若しこちらが勝ちたいあまりに、不正なことをすれば、對手も同様のことをするのである。不正と不正、それは固より無事に治まらない。紛擾か、亂暴かは次いで起るであらう。斯くて眞正なる競技が穢されることになる。勝ちさへすればよいと云ふのは、卑劣な利己的の考へ方で、よくない。要するに、試合の際には、全力を傾注して堂々と闘ひ、出來得

紛擾
フンゼウ。

武士道
武士の常を守るべき道、主として忠義・武勇・廉恥・禮儀等を重んじ、卑怯・未練・貪慾を排する道。

れば勝ち、對手が強くてどうしても勝てない時には、潔く敗れるがよい。勝つて誇る態度も見苦しいものであるが、また敗けて、ものいひをつけたり、愚痴をこぼすほど女々しい行爲もない。男らしく、堂々と勝つことは至難ではないが、立派に敗けることは難中の難に屬する。この至難な行動を敢行するところに苦心はあるが、その苦心の存するところに修養がある。「勝つにしても、敗けるにしても、どうぞ男であつてもらひ度い。」これは、今日の競技道德の教ふところである。吾等の祖先なる武士に於ては、命のやり取りの際に於てさへ、「男らしく」「立派に」振舞ふことを忘れなかつた。立派

文化

な武士は、決して勝たんがために卑怯な眞似はしなかつた。生死に於てさへなほさうであつた。それに比較すれば、競走の際や、球技の際に於て、男らしく振舞ふことは容易なわけである。下手な眞似をして、なまじ勝者の空名を獲るよりも、寧ろ男らしく負けた方が、どれだけ立派であるか知れない。如何なる場合でも、榮ある榮光か、然らずんば寧ろ敗を選ばん、の心掛けが必要である。運動競技の際に現れる競技道徳は、其の團體の文化の表現であるといはれてゐる。英國は古くからスポーツの國として、世界より許されて居るだけに、スポーツは實に盛んである。而して之に對する彼等の考は極めて眞摯なものである。彼等がスポーツ

を尊重するのは、スポーツの精神的方面に在るのである。斯くの如くにして英國少年の品性は試合によつて築き上げられる。

我が國で行はれるスポーツは、多くは彼等のスポーツの形を學ぶに急で、動もすればその精神が忘れられようとする傾向のあるのは、甚だ遺憾なことである。希くは吾人は、スポーツの外形を取容るゝと共に、その精神を學んで、スポーツ本來の精神の發揮に資し、以て肉體及び精神の完全圓滿なる發達に資したいものである。（大谷武一―體育の諸問題）

大谷武一
文部省體育研究所技師。東京高等師範學校教授。

那須七騎弓矢に遊ぶ給かな

蕪村

山頂に立ちて
明治三十五年著
者が鎗が嶽の絶
頂を極めし時の
文章。

峻峰

はげしきみね。

蝸附

蝸牛の如く附著
すること。

鎗が嶽

飛驒山脈中の高
峰にして、岐阜・
長野兩縣に跨
る。

一七 山頂に立ちて

見よ、天地の間に何物かこの絶大なる眺あらん。

中央の大山系に、高さ一萬尺を上下して龍蛇の起伏する
か如き大山列岳は曉霧を突破して、萬浪千波の中に立つが
如し。その霧は極めて濃くして厚く、或は綿の如く、或は氷
の如く、或は潮の如く、或は海の如し。

顫く足を踏みしめつゝ、三角測量標の立てる一峻峰に蝸
附して登る。幾度か落ちんとしては岩角にしがみつき、瞑
目して漸く攀終りたる頂、此の頂こそは我が鎗が嶽の最高
點にして、海拔實に一萬一千六百五十二尺、山嶺已に秋の來

炎帝の威

はげしき夏の暑
さをいふ。炎帝
は夏をつかさど
る神。

蒲田谿谷

岐阜縣にあり。
鎗が嶽と笠が嶽
との間にある谿
谷。

笠が嶽

岐阜縣の東北隅
吉城郡にある火
山。

蜿蜒

横嶽

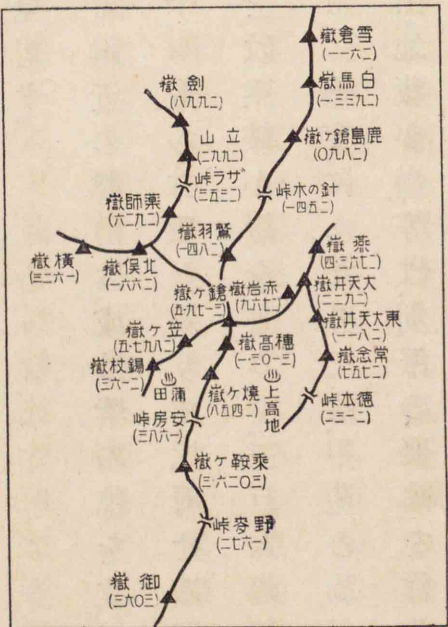
富山・岐阜兩縣
の境にあり。

藥師嶽

富山縣上新川郡
にあり。

富山平原

富山縣富山市附
近一帶の平原。



れるを思はしめ、八月の炎帝の威、今果して何處にかあると

思はるゝばかりなり。

西の方蒲田谿谷を隔
て、大屏風を立てたる
が如く見ゆるは笠が嶽
にして、彼我兩山嶺間の
直徑僅かに數十町、臂を

伸ぶれば、彼の山頭を撫せんとす。この一帯蜿蜒たる長蛇

の如き山巒の中に、向背相望んで立てるは、横嶽・藥師嶽等な
り。是等の山嶺より搖落されたる霧は、遠く數十里の外に
飛んで茫漠として烟り、富山平原に至りては、はや水平線下

のものたり。

東には一萬尺餘の常念が嶽屹立す。我、去年松本平原より、鎗が嶽と此の山とを仰觀して、その莊嚴にうたれたるこ
とあり。然るに、今は彼の平原も濃霧の爲に覆ひ盡されて
見えず。

附近の群山は、或は紫の穂を立て、或は藍の穂先をあらは
す。南の方、我と隣りて比肩せる穂高と、更に隔りたる御嶽
とは、乗鞍が嶽を夾みて、三巨人の相笑みて我を招くに似た
り。南東にあたりては、甲斐の駒が嶽聳え、之に連れる鳳凰
山、地藏が嶽等は、別派の聚落を作る。その多角形なる大塊
は、雲海を踏んで、今にも眉宇の間に迫り來らんとするが如

常念が嶽

長野縣南安曇郡
にあり。

松本平原

長野縣松本市附
近の平原。

穂高

岐阜・長野兩縣
の境にある山。

御嶽

岐阜・長野兩縣
の境上に屹立す
る休火山。

乗鞍が嶽

長野・岐阜兩縣
の境をなせる飛
騨山脈、即ち日
本アルプスの中
にある山。

駒が嶽

山梨縣北巨摩郡
の西境(甲斐の
國境)に聳立す
る高峰。其の脈
西に延びて地藏
が嶽、鳳凰山に連
る。

聚落

シヌウラク。

し。

頭を回らせば、北には、越中群山の霸王たる立山、雲底を撫
でて悠然たり。然れども西境の大君たる加賀の白山の見
えざるは憾みなり。しかも萬山中に於て、端嚴微妙、我をし
て拜跪せしめたるもの、これ富嶽にして誰かは讚せざらん。
辯ぜんと言辭なし。

思へらく、自然は地に在りて絶大至高なる記念碑を立て
ぬ。麗しきかな蜻蛉洲。その崇高美は、一に聚りて、こゝな
る中央大山系に存すといふべし。

(小島烏水「鎗が嶽紀行」)

立山

富山縣中新川郡
にある山。

悠然

イウゼン。ゆつ
たりとしたるさ
ま。

白山

石川縣と岐阜縣
との境に跨る山
にして白山火山
脈の主峰。

端嚴微妙

拜跪

ハイキ。拜しひ
ざまづくこと。

富嶽

富士山。

蜻蛉洲

大日本國の稱。

豊前

大分・福岡兩縣の一部。

山國谷

大分縣下毛郡にあり。

雲華上人

名は大舎。嘉永三年歿。年七十八。(二四三—二五一〇)

上人

シヤウニン。智徳のすぐれたる僧侶の尊稱。

頼山陽

名は襄。字は子成。通稱は久太郎。儒者。安藝(廣島縣)の人。天保三年歿。年五十三。(二四四〇—二四九二)

耶馬溪

大分縣山國川の溪谷。

一八 山陽と法海

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大



頼山陽

含は雲華と號し、文學を好み、書畫を善くし、廣く文人墨客と交り、別して頼山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十九の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。山陽が「耶馬溪、天下無」と、激賞してから、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたのである。

肥後

熊本縣の全部。

八代

熊本縣八代郡八代町。

法海

號は桶州。眞宗の僧。肥後(熊本縣)の人。天保五年歿。年六十七。(二四二八—二四九四)

懇勸

インギン。

藝州

安藝の國。廣島縣の一部。

當時、肥後國八代の光徳寺に易行院法海といふ、學徳共に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次、豫て雲華上人より得た紹介を以て、遙々と法海師を尋ねて行き、「頼久太郎、老師の高名を慕うてお尋ね申した。お取次をお願ひ申す。」と申し入れた。折柄机の前に端坐して讀經してゐた老師は、やをら起つて、山陽に面會した。山陽は初見の挨拶をすませてから、自分の書いた「楠公傳」の稿本をその懷から取出した。そして殷勤に、「老師の御批評を。」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふも

御邊
同輩を呼ぶ敬語。

雲耶山耶吳耶
越水天琴髯青一
髮萬里泊舟天
草洋煙橫蓬
窓日漸沒瞥見
大魚波間跳太
白當船明似
月。

忠臣は云々
諺語に「忠臣出
於孝子之門。」
とあり。
大それた事
極めてけしから
ぬこと。

の京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようともせず、忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。」この時、

雲耶山耶吳耶越水天琴髯青一髮萬
里泊舟天草洋煙橫蓬窓日漸沒瞥見
大魚波間跳太白當船明似月

西遊草履の書
山内輝正公の時己丑九月を記す
正長 繪

法海師の鋭
い眼光は、山
陽の面上を
電のやうに

射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師は更に語を繼いで「忠臣は必ず孝子の門に出づ。」とは、古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を書くとは、大それた事ではないか。楠公の靈、若し知るあらば、果して何と思

はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。」かく言ひ終つて、すつと起つて元の座に歸り、靜かに讀經すること初めの如くであつた。

程經て頭を擧げた山陽は、老師の前に默禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の腹の底から出た感歎の辭であつた。あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我が意を得たといふやうに、「さうであつたか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそれを實行すべき時である。」といつた。

陽明學
明の大儒王陽明
の唱へたる學
說。
知行合一
チカウガフイ
ツ。

夏日の日・冬日の日
左傳に「趙襄、冬日之日也。趙盾、夏日之日也。」その註に「冬日、可^{ハシ}愛^ス、夏日、可^{ハシ}畏^ルとあり。

虚心
虚にして往き云云
莊子に「虚而往、實而歸、固^ニ有^ル、不^レ言^フ之^レ教^ト。」とあるによる。

南條文雄
文學博士。佛教學者。岐阜縣の人。昭和二年歿。年七十九。

山陽は覺えず立上つて、法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ。」といふや否や、早々行李をととのへ、翌日早朝に發足して、老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎へ、吉野や伊勢にお伴して孝養を盡した。「輿行吾亦行、輿止吾亦止。」といふ「侍興歌」などに於て、數々の美談を遺したのも、基づく所は兩師の言を虚心に受入れた爲である。「虚にして往き、實にして歸る。」とは、實にこの事で、山陽が善く學ぶ所に背かなかつたのも、全くこれによるのである。

(南條文雄「修養録」)

洪量
コウリヤウ。ひろき度量。

品川
東京市品川區。

芝田町
東京市芝田區町。

板橋
東京市板橋區。

伊地知
名は正治。明治元年東山道先鋒總督參謀として東征す。宮中顧問官。伯爵。明治十九年歿。

一九 西郷隆盛の度量

西郷の大度洪量に就いて、維新當時の事を少し細かに話さう。官軍が品川まで押寄せて來て、今にも江戸城へ攻入らうといふ際に、西郷はおれが出した僅か一本の手紙の爲に、芝田町の薩摩屋敷までのそく、談判にやつて來た。かういふ事は、なかく、今の人には出來ない事だ。あの時の談判は實に骨だつた。官軍に西郷が居なければ、話はとても纏まらなかつたらうよ。その時分の形勢といへば、品川からは西郷などが來る。板橋からは伊地知などが來る。又江戸の市中では、今にも官軍が乗込むといつ

て、大騒ぎをしてゐる。しかし俺は外の官軍には頓著せず、たゞ西郷一人に眼をつけた。



勝海舟

そこで今話した通り、ごく短い手紙を一通やつて、双方何處でか出會つた上、談判致したいといふ旨を申し送り、また其の場所は、田町の薩摩の別邸がよからうと、此方から選定してやつた。すると官軍からも早速承知したと返事をよこして、いよく何日の何時に、薩摩屋敷で談判を開く事となつた。

引つ切下駄

當日俺は、羽織袴で馬に乗つて、従者を一人連れたばかりで、薩摩屋敷へ出かけた。まづ一室へ案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來て、これは實に遅刻しまして失禮。と、挨拶しながら座敷に通つた。その様子は少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

江戸百萬の生靈

さていよく談判になると、西郷は俺のいふ事を一々信用してくれ、その間一點の疑念も挿まなかつた。一色々むづかしい議論もありませうが、私が一命にかけて御引受します。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産

自家撞著
ジカドウチャ
ク。
屯集

桐野
名は利秋。鹿兒
島の人。西南の
役に西郷に従ひ
自殺す。

とを保つ事が出来、又徳川氏も滅亡を免れたのだ。若しこ
れが他人であつたら、いや貴様のいふ事は自家撞著だ。とか、
「言行不一致だ。」とか、澤山の兇徒があゝの通り處々に屯集して
ゐるのに、恭順の實は何處にあるか。とか、色々喧しく責立て
たに違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。しか
し西郷はそんな野暮は云はなかつた。その大局を達觀し
て而も果斷に富んで居たには、俺も感心した。
この時の談判がまだ始まらない前から、桐野などといふ
豪傑連中が大勢で次の間へ來て、竊かに様子を窺つて居る。
薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひし／＼と詰めかけて
居る。その有様は實に殺氣立つて物凄いなものであつた。

泰然
タイゼン。

然るに西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないも
のゝやうに、談判を仕終へてから、俺を門の外まで見送つた。
俺が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊が、どつと
一時に押寄せて來たが、俺が西郷に送られて立つて居るの
を見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。俺は自分の胸を
指して兵隊に向ひ、いづれ明日中には何とか決著致すで
あらう。決定次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬ
こともあらうから、よく／＼この胸を見覚えおかれよ。と言
捨て、西郷に暇乞をして歸つた。
この時俺が殊に感心したのは、西郷が俺に對して、幕府の
重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終座を正し

天空海闊
心のひろくとしてゐるさま。

勝海舟
名は麟太郎。舊幕臣。明治に至り伯爵となる。明治三十二年歿。年七十七。

て、手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光を以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風を見せなかつた事である。その度量の大きいことは、所謂天空海闊で、見識ぶるなどといふ事は固より少しもなかつた。

(勝海舟—氷川清話)

偶 感

幾たびか辛酸を歴て、志始めて堅し。

丈夫は玉碎、輒全を愧づ。

我が家の遺法、人知るや否や。

兒孫の爲に、美田を買はず。

(西郷隆盛)

二〇 散 亂 心

動搖
ドウエウ。



幸 田 露 伴

心の一處に注ぐ能はずして、動搖定まり無きを散亂心といふ。例へば書を讀むに當つて、一心紙上にあること能はず、或は鳥の聲を耳にするに因り、心直ちに鳥のあたりを指して馳せ去り、或は車の窓前を過ぐるによつて、心また車を追うて去るが如し。これを散亂心を以て事を爲すとはいふなり。

古の人はこの散亂心を以て事をなすを忌むこと甚しく、學問にせよ、功業にせよ、爲して成らざる事あるは、大抵この

散亂心を以て事に當るが故なりとまで思考せりとおぼし。如何にも散亂心を以て事を爲して、能く成さんことは、眞に覺束なかる可し。散亂心を以て、事を爲して成す能はざるの實例は、算術を學ぶに當つて何人も明かに認むるを得べし。推考の力を要する算術上の問題に對して、若し心を其の問題に專注する能はず、徒に昨日見しところの演劇の光景を想像し、若しくは今夜某處に於て觀んとするところの幻燈を想像し、若しくは自轉車に乗りて走る愉快を想像しなどせんには、推考の力はこれが爲に鈍りて、腦中の散亂を惹起し、結局茫然として自失するに至るべし。

されば算術上の問題に對してのみならず、如何なる場合

推考
スキカウ。

幻燈
うつしゑ。

惹起
ジャクキ。
自失

聰明
ソウメイ。
絶倫
ゼツリン。

八人藝

にても、散亂心を以て事を爲して能くすべからざるは、定まりたる事なり。世には聰明絶倫の人ありて、一時に多くの人の口々に訟ふるを聞き得、また手をもて畫をなしながら、心には詩を作り得るなどの人も無きにあらず。かゝる人の歴史にも見え、眼のあたりにも見る事となれば、散亂心を以て事を爲すも差支なかるべしといふ疑あらん。されど實は八人藝めきたることを爲し得たりとて、毫も尙ぶに足らず。俗人は驚きて偉とこそなせ、識者はいかで偉なりとせん。たま／＼左手に圓を畫き、右手に方を畫くが如きことを能くする人も無きにあらねど、假令實に之を能くすとも、多とするに足らざるのみならず、事もと例外に屬すれ

ニュートン
Sir Isaac
Newton 英國の
物理學者。(一六四三
—一七二七)

不斷心

龍樹菩薩
印度の佛敎家。
西曆二・三世紀
頃の人。

ば、常人の學んで之を能くすべきにあらず。
ニュートンは偉人なり。されど、人の如何にして君は引
力につきての大發明をなし給ひたる。」と問へるに答へて、「我
は不斷心によつて。」と答へたり。不斷心とは散亂心の反對
なるべし。龍樹菩薩は大賢なり。されど散亂心の心は、風中
の燈火の如し、明かなりと雖も物を照らす能はず。」と説けり。
まことに風の中の燈火とは巧に散亂心の働を形容せるも
のかな。

聰明の人や、もすれば、中年にして愚鈍の人に凌がるゝ
ことあるは、屢々世人の眼にするとところなるが、予の實驗にて
は、其の原因、大抵は聰明の人の散亂心を以て事に當るによ

因縁

インネン。

神情

シンジャウ。

頑癖

グワンベキ。

専心無適

心をひたすらそ
の物事に注ぎて
他を顧みざるこ
と。

天資
下風に立つ

つて、結局敗者の地位に立つに至るが如し。蓋し聰明餘り
あれば心に餘裕あり。心餘裕あれば勢ひ散亂動搖せんと
す。聰明の青年、書を讀めば書甚だ讀み易く、算をなせば、算
甚だなし易し。こゝに於て因縁の去來し、神情の馳せ逸す
るに任せて、一心散亂動搖し、日を累ね月を積み、終に頑癖
をなすに至る。散亂心を以て事に處し、物に接するの習を
なすに至れば、聰明また聰明ならず、風中の燈火甚だ力無く、
愚鈍の人の専心無適にして、物を處し、物に接するの習をな
せる者に勝つ能はざるや必せり。

天資甚だ高きもの、終に凡庸の人の下風に立つに至る、誠
に惜しむべきにあらずや。聰明の恃むべからざるは、昔人

衰耗
スキガウ。

もまた多くこれを言へり。散亂心の戒めざるべからざるは、驕慢心の戒めざるべからざるより甚し。人の聰明は四十歳五十歳に至つて必ず衰耗すべきものなれば、聰明未だ衰へざるに及んで、一心散亂の悪習をなすこと無く、而して人々自己が爲さんと欲するの業をなすの素地をつくるべきなり。

(幸田露伴―露伴叢書)

山芋掘りは山芋の蔓を見て、芋のよきとあしきとを知り、鰻釣りは泥土の様子を見て鰻の居ると居らざるとを知り、良農は草の色を見て土の肥えたと瘦せたとを知る。こは所謂「至誠神の如し」といふものにして、永年刻苦経験して發明したるものなり。技藝にこのこと多し。侮るべからず。

(二宮翁夜話)

碧蹄館

朝鮮京畿道京城府獨立門外義州街道四里餘に在り。

南大門

朝鮮京城の正門にして、京城八門の一。崇禮門と稱す。

鴨綠江

朝鮮と滿洲國との境を西に流れて西朝鮮灣に入る大河。

小西行長

秀吉の臣。文祿元年(二二五二)正月征明軍の先鋒となる。關が原の戦に敗れて徳川氏の爲に斬らる。

小早川隆景

毛利元就の三男。備後(廣島縣)三原城主。

二 碧蹄館の戦

朝鮮南大門の軍は、文祿二年正月二十六日の事なり。明の援兵、鴨綠江を涉り押來る。小西行長叶はず引退く時に、小早川隆景は、開城府に止まり、一軍せむと待ちかけたり。浮田秀家使を以て、疾く都城に引返して一所に軍あるべし。と申されしかども、隆景、吾、日本を打立ちしより異國に討死せむと思ひ設けたり。年老い候ひぬ。今生の思出に異國の大軍に駈合はせ、大國の耳目を驚かす軍して、屍を戰場に晒さむと存ずる所なり。とて、引取らむ氣色無かりければ、又大谷吉隆を遣して、誠に雙なき志古の名將も是には過ぎじ。

浮田秀家
豊臣氏五大老の一人。

大谷吉隆
豊臣氏の臣。越前(福井縣)敦賀城主。關が原の戦に敗れて自刃す。

黒田長政

秀吉の臣。後、徳川に従ふ。福岡(福岡縣)城主。元和九年(二二八三)歿。

久留米秀包

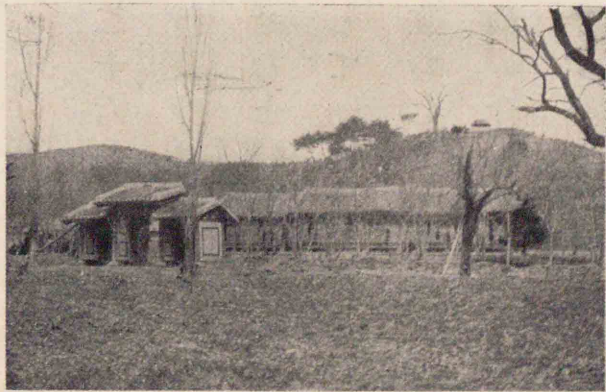
毛利秀包のこ。久留米(福岡縣)城主。

李如松

文祿・慶長の役に於ける明軍の將。

然ればとて二萬許りの兵にて大軍に取巻かれ、空しく討死あらむ事口惜しく候。只疾く都城に入りて日本の軍の先陣せられ候へ」とありしかば、隆景「さらば日本の先陣は隆景仕らうずるにて候。人に先陣をば駈けさせじ」とて、黒田長政・久留米秀包等と打連れて都城に歸られしが、南大門の外碧蹄館に陣せられけり。

二十六日の曙に、李如松が軍押來る。旌旗を立連ねたる兵數何十萬とも測るべからず。秀家を始めとして、大軍に野合の合戦



碧蹄館趾

立花宗茂
筑前(福岡縣)立花城主。後、柳河に移る。寛永十九年(二二〇二)歿。

奇兵

毛利元康

元就の第七子。隆景の弟。鞍しほでの四方手。鞍しほでの前輪後輪しほでに各々二箇所づつ著くる細き革緒。

危からむ。都城に立籠らむ」と言はれし時、立花宗茂目を見出し、刀の柄に手を懸け、「敵怖ろしければとて逃籠る様や候。唯馳合はせ蹶散して候はむ物を」と、勇まれしかば、「然らば誰か先陣せむ」と言ふに、隆景「吾先陣せむと豫て言ひつる事よ。誰人にてもある、思ひも寄らず」とて、やがて陣を進めらる。士大將粟屋四郎兵衛・村上彈正・野島掃部等三千餘騎、喚き叫んで相戦ふ。奇兵となりて右の方三町餘に陣せし立花宗茂・久留米秀包・毛利元康等の六千餘騎は、横様に懸る。隆景は旗本一萬餘を率ゐて一文字に切つて掛り、忽ち敵を打破りて、首級多く得られけり。宗茂は取つたる首二つ鞍の四方手に付け、隆景の方に來られしを見て、取敢へず、「見事に候。」

大綿帽子
大形の綿帽子。
湯淺常山
名は元祿。江戸時代の儒者。池田侯に仕ふ。岡山の人。天明元年歿。年七十四。(二二六八—二四四一)
常山紀談
戦國時代より徳川初世に至るまで百餘年間に於ける名將傑士の言行を載録せしもの。

と言はれしかば、宗茂「いつも仕るにて候。」と答へられけり。此の軍未だ始まらざりし時、黒田長政唯一騎、徒歩の士六七人召具し、隆景の旗本に来る。隆景「よくこそ來られ候へ。先陣の粟屋に力を添へ給へ。」と言はれしに、長政大いに喜び「承り候。」とて、先陣に向はれけり。殊に寒風烈しう吹きたり、ければ、長政大綿帽子を被られしが、先陣に行きて帽子を脱いで、世に聞えける水牛の兜の緒を締められけり。隆景の軍兵どもこの勇姿をながめて、「今日の軍に勝ちたり。」と、勇みけるとかや。長政今年二十五歳、武勇を斯く人に信ぜらるる事竝々にはあらざりけり。

(湯淺常山—常山紀談)

本多重次

作左衛門と稱す。徳川家康の功臣。三河(愛知縣)の人。
徳川殿
徳川家康。
疔
腫物の一種。
宗徒
ムネト。

二二 本多重次

去にし天正十三年三月に、徳川殿御背中に疔うやうといふもの出で来て、すでに危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれどもその驗しとなく、たゞ弱りに弱らせ給ひ、みづからもこれまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召し集めて、御後の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、土民・百姓などに至るまで、そのほどくくに隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

本多重次、御枕に取りつき、泣くく申しけるは、「殿も定めて覚えさせ給ひなむ。重次が昔この病を受けしに、立所

詮なし
センなし。

に驗得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫すでに手を束ね、家康また死を決す。この上醫療その詮なし。且は命を惜しむに似たり。」とて、用ひ給はず。重次大いに怒つて、「かほど大事の腫物、輕々しく思し召し侮つて事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治しまゐらせむとするをも、用ひ給はで失せ給はむこと、御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつての御供かなふべからず。さらば御先へ參らむ。」とて、御前を罷り立つ。

あつたらしき命

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く

殿ばら

侍ふ人々走り出で引止め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らして、「最後の暇乞うて罷り申すものを、見苦しい殿ばらの止めやうや。」と罵つて出でむとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、「げにさも候。」とて、御前に參る。

徳川殿、「汝はものに狂ひてかくはいふか。家康未だ死しはてぬに、假令家康が命終るとも、汝等が世にあらむを頼みにこそ死すべけれ。また汝等もいかにもして、一日も世に残りて、若き者どもも掟して、我が家の絶えざらむやうを計らむとは思はずして、詮なき死の供せむとする事やある。」と仰

犬死
むだ死。

せければ、いや／＼それは人によつての事に候。重次も今少し年だに若く候はむには、仰せまでも候はず、犬死せむ人の御供、その詮なし。重次若年の昔より、こゝ彼處の軍に従つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふほどのかたはは、重次が身一つに集りて、世に交らむこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れも敬はれも仕れ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候ふまじ、まづ御掣の北條殿、我が國々を取らむとし給はむに、若き人々が行末久しう仕へむと頼みきつる主に、忽ち別れて氣おくれし、はか／＼しき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家亡されむこと、また踵

北條殿
北條氏直。家康の女壻。小田原城主。天正十九年(三五)歿。

譜第
フダイ。代々其の主家に仕ふる臣下。

武田
武田勝頼。天正十年(三四)織田・徳川の兩軍に攻められ、天目山に於て自殺す。年三十七。(二二〇六―二二四二)

を旋らすべからず。重次それまでながらへて、『あの年寄つたるかたはものは、徳川殿の譜第にて何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらむ。』と、後指さゝれむこと、老の恥何事かこれに過ぎ候べき。このごろまでも、武田の家人等、御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にもあはれに思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れまゐらせむが悲しきばかりにも候はず。我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候。』と申す。『汝がいふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに到りて家康空しくならむとも、汝も

また家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生き残りて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や」と仰せければ、重次が申す旨に任せられむには、重次いかでまた仰せをや背きまゐらすべき」と申す。「さらば醫師召させよ」とて召さる。

醫師やがて参りて、「御灸治よろしかるべし」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛み覚えさせ給はねば、艾を増し加ふることも多くして後、いさゝか痛ませ給ふ由仰せければ御薬をつけてまゐらせ、お薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに御腫物潰れて、膿水・血夥しく流れ出でて、御惱たちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御

灸治
キウヂ

艾
モグサ

膿水
ノウスイ

藩翰譜

徳川家宣の命を受け、新井白石の著作せしもの。慶長五年(二二六〇)關が原の戦終りてより、延寶八年(三三四〇)に至るまでの一萬石以上の諸侯三百七十七家の傳記・沿革等を集録したるもの。

前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。この人かゝる奉公のことゝも、世に傳ふること多し。
(新井白石「藩翰譜」)

天下後世までも信仰悦服せらるゝは、唯これ一個の誠なり。古より、父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難きが中に、獨り曾我兄弟のみ今に至りて兒童婦女子までも知らざるものあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。
今の人、才識あれば、事業は次第に成さるゝものと思へども、才に任せて爲す事は、危くして見て居られぬものぞ。體ありてこそ、用は行はるゝなれ。
(西郷隆盛)

犬山城

愛知縣丹羽郡犬山町北方の丘陵にありし城。その天主閣は今尙存す。

木曾の大江
木曾川をさす。

鎮江

江蘇省西南部の都會。揚子江の南岸にあり。

金山寺

鎮江城外にあり。鎮江三大巨刹の一。

長江

揚子江の一名。

二三 犬山城の夕ぐれ

自分はいつまでも立去る事が出来なかつた。

木曾の大江を眼下に見おろす犬山城の最上層の欄によつて居ると、旅人らしい翁嫗や、中學の教師らしい人、學生などが代るく、上つて來ては、絶景をたゞへつゝ、いづれも周圍の廊下を一めぐり二めぐりしては下りて行く。

靜かに眺めつゝをると、しづかな心の底に、中々にあわただしい舞臺の、場面の變化を見るやうな氣分が往來する。

嘗て南方支那に遊んだ折、鎮江の金山寺の塔にのぼつて、長江の流を見おろした時が、ふと思ひうかぶ。もとより彼の

眺の廣さには及ばぬが、趣は相似てゐる。彼の時は冬の半ば、江の水は濁つて居て、對岸の大陸の色は黄にまた灰色であつた。此處はそれとは異つて、見おろす流は清く碧い木曾川、遠近に山もあり田もあり、満目みな緑なす夏の色である。

自分は幼くから城や塔が好きであつた。塔の畫の多く載つて居る大和名所圖繪は、幼時父から貰つて、特に自分のもの自分の本として大事にして居た。蒲生氏郷が築いた松坂の城跡は、小學校に通ひ初めた自分の常に遊びに行つた所であつた。父に伴なはれて漫遊の旅に上つた時、九歳の夏に見た金澤の城は、今も鮮かに目に見える。木曾の大

大和名所圖繪

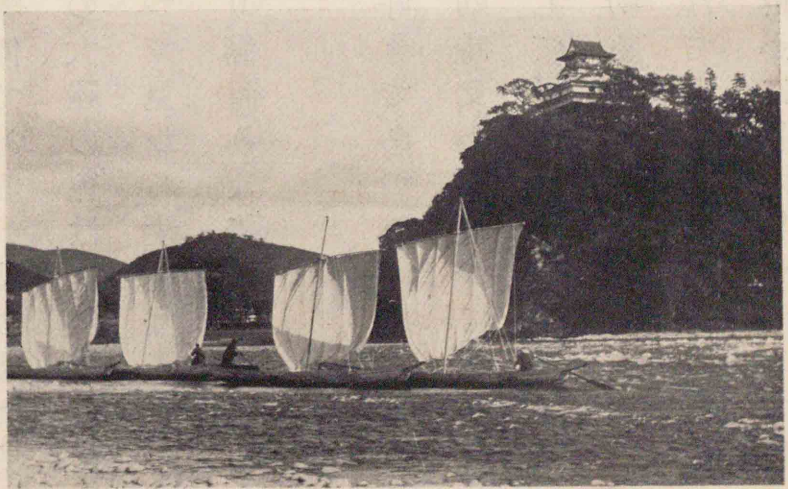
七卷。秋里離島の著。

蒲生氏郷

武將。信長・秀吉に仕ふ。文祿四年歿。年四十。

(二二一六—二二五五)

河の上——青葉に囲まれた山の上に聳えたつ犬山城の景色にあらがれて、この眞夏にはるる、來たのも、この性ゆゑであつた。而してこの絶景とこの幽邃の感じとは、自分をしてかくたづね來た事を喜ばした。大河に臨んだ山上の古城、月の夜、城のもとを漕ぎ下る船、空想は果しな



犬山城

傳奇

く續いて、さまざまの傳奇は幾つとなく自分の心の中に、半ばつくられては壞された。

現の夢は覺めた。若い男が尺八を持つて上つて來た。自分の休んでゐる戸口と反對に、今一つある戸口の敷居にしゃがんで尺八を吹き出した。夏の日はまだ暗くはならないが、遠い山々は淡い紫の黄昏の色に變つて行く。時も時、古城の上にたゞよふ笛の音を、默然として聞いてゐると、古城の内は唯笛の音の領する所となつた。一曲やんだと思ふと、男は立つて、その戸口の戸をとざして關木をかけた。一方が閉ざされたので、部屋の中は稍、薄ぐらくなつた。男は、自分の方へ來て、あなたは御上りになつてから二時間に

關木
クワンギ。

もなる。しめる時間は來ましたが、もう御下りの事と思つて待つてゐましたが、餘りおそいから閉めます。」と云ふ。自分はいつ美しい眺に我を忘れておそくなつた由を軽く言譯しつゝ、この天守閣の壁や天井が餘りに新しく感じられる由をいぶかしみ云ふと、男は、近頃修繕したので外部は此の様ですが、内部を御覽なさい。」と云つて、關木をはづして隅の天井板をあげて、關木を梯子のやうに立てかけ、これにつて御覽なさいと云ふ。のつて見ると、下からさす光線で、眞暗な天井裏には急に古い塵の香がたゞよつて、その黒闇の中には、此の城を守つて居るあやかしが、黒い眼を光らして居さうである。

あやかし

自分は、この若い城守の好意にむくいる爲手帳を裂いて、歌一首をしるし、旅の歌人と書き添へて與へた。讀みつゝ、「どこの方ですか。」と問ふ。「いやお互にどこの誰とも知らないで別れるのもおもしろいでせう。」と言へば男もほゝゑんだ。

男は自分の休んでゐた方の戸をも閉ぢようとする。「一寸待つてほしい、もう一度景色を眺めたい。」と云うて、又いつか見る折のありやあらずやと思はれる美しい眺に一瞥を與へて、階段を下つた。上の方には彼の男の戸口や窓をしめる音がばた／＼と聞える。犬山城のきざはしの道は、段々と暗になつて行く。

一瞥

自修文

一 凧 あげ

鈍く光つた藁垣の蔭に、長く伸びた路の臺がほゞけだつて、白い矮鶏ちびどりが二三羽餌をあさつてゐる。

春の彼岸の日は、ぼつと赤みをおびて、庭の隅の甘藷苗場は、まるで蒸風呂のやうに蒸發してゐる。

土間に立つて、明るい外を見てゐると、日光が雨のやうに降つてゐる。その日光のなかに立つてゐる木竹鶏猫犬童子それ等は皆、影をもたぬものはない。黒く軟かい土にひいた物の影の親しさだ。

ほゞけだつ

春の彼岸

春分の日を中日としてその前後各三日を合せたる七日間を云ふ。

蒸風呂

浴場の四方を密閉し湯氣にて體を蒸し温むる風呂。

影繪

うつしゑ。人物・鳥獸等の形を燈光によりて障子などにうつす遊戯。

極樂淨土

佛敎にて云ふ西方十萬億土を経過せる所にある阿彌陀如來の居所にて全く苦患なき安樂の世界。

阿夫利

阿夫利山(今の雨降山)のことにて大山の別稱。神奈川県に在り。横濱市の正西、國府津の正北に當る。海拔一二五〇米。

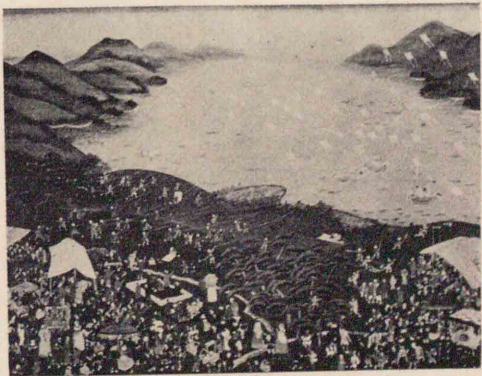
うつすらと青んだ畔と、一ぱい春の水を張つた水田を向うに見せた明るい村の往來を、源助爺さんを先にして十人ほどの村の老人や老婆達が、何れも皆黒い包を背負つて、杖をついて通るのが、影繪のやうに次から次に續いて行く。そしてその人達は、低い聲ではあるが、樂しげに御詠歌をうたひながら行く。極樂淨土禮讚の念佛を申しに山に行く人達である。それから一時間ほどして上の山の畑の畦で、私は獨りで凧を揚げてゐた。

凧はよくあがつた。凧糸を手に握つて高い畦に腰を掛けてゐる心持はよいものだ。全く無心の境地である。

私の凧の二本の尾はゆらり〜と空中に光つて波を打つてゐる。その尾の裂けてゐる下には、阿夫利の黒い尖り嶺がそゞり立

春の浄土

つてゐる。私の眼は凧を離れてその山の巖をながれる。思ひきり谷が深く喰ひ入つてゐるほとりで、更に前山の圓い線がふつくと浮んでゐる。その山の上にはほんの掌ほどの廣さの赤い毛氈が敷かれてある。その赤い毛氈の上には、豆粒ほどの人が黒く固まつてゐるのが遙かに見える。そして、春の浄土を禮讚する老人達の念佛の鉦の音が、その山上から遙かに凧の糸を傳つて私に漂うてくる。



筆女榮若上池 げあ凧の崎長古

誰か向うの往來を馬を曳いて行く。

麥畑のなかを行く旅人がある。黒い帽子をかぶつてゐる。

ゆたくと天秤を撓はせて行く農夫がある。

撓はす
シナはす。

盤臺

子供が一人農夫の後を駈けて行く。

日の丸の旗を廻りに立てた盤臺を頭に載せて、腰をふりくく行く夫婦の飴屋がある。

飴屋は、何と思つたか原つばの菜の花畑の真中で、でんくくと太鼓をうつて何か唄をうたひながら二人で踊り出す。

二人は調子づいてぐるくく緩く體を廻しながら、ふらりくくと腰を浮して踊つてゐる。

テンポ
Tempo 速度。

太鼓の音がそのあひまくに緩いテンポで鳴る。誰も見てゐる人とはなない原つばの眞晝である。

私は人形踊りのやうな飴屋の踊りをついつとりと眺めてゐた。そして、張りきつてゐた糸が緩くたるんで、何時か知らぬ間に一二町さきの桑畑のなかに凧の落ちてゐるのを知らぬほどであ

洞間聲
げびたる調子は
づれの聲。

つた。

「おい、誰の凧だ、おちたではないか。」と洞間聲で呼ばれて初めて気がついた。あわてゝ立上つて見ると、平たい大きな赤ら顔が菜の花の上で笑つてゐる。

「坊やの凧か、ほうら、よいか、糸をたぐるのだよ。」と高く両手で上にあげて呉れる。

轉換

私は糸を片手で高くさし上げて畦路を一散に駆け出す。低くたるんでゐた糸がつと張つて、斜に高く上つて行つたので、私は初めてほつと安心をして體を轉換させる。

凧は喜ばしげに、うつすらと青んだ草山を這上り、村の老人達が山上禮讚の念佛を申してゐる邊を一なぐりに掠めたと思ふと、臆て阿夫利山の頂上を突抜けて、りゆうくと空に上つて行く。

私は安心して、また畦の上に腰をおろす。

一踊り踊り終つたと見えて、ふらくとまた腰を揺りながら行く夫婦の飴屋の後姿、と言つても日の丸の旗をたてた頭の上の盤臺丈けが、菜の花の上を流れて行くやうに見える。

(前田夕暮―朝青く描く)

市中や馬にかけ行くいかのぼり	涼	菟
凧切れて白根が嶽を行方かな	桃	妖
いかのぼり昨日の空のありどころ	燕	村
凧上げてゆるりとしたる小村かな	一	茶
凧見るや我も昔は男の子	太	祇

二 秋の海

海岸を歩いてゐた。

いかにも秋の海だと思つた。陸上の總てが様子を變へると共に、海上にも季節の變化は著しかつた。そしてその海と陸との變化が、互に實によく調和し融け合つてゐる。陸上のものが黄ばむにつれて海は油を流したやうに靜穩になり、岸に碎ける波は小さく、しなやかになり、其の度に響く圓い優しい音は、何と云ふ快さであらう。

見よ、あの齡老いた、而も赫々たる太陽の満足げに笑ひながら沈んで行く様を。

さうだ。地上に秋が酣であるやうに天上にも秋は漲つてゐる。

赫々

酣

タケナハ。

明澈

自足した心持

凡てが秋だ。明澈で、薄ら寒く、高く、靜寂で、光に溢れてゐる。その下を歩いてゐる者、佇んでゐる者も、自づとその心をうけて秋のものになりきつてゐる。そして氣持のいい安泰な自足した心持で、自分も萬物と共に等しく秋のものになり、することに依つて幸福と落ちつきとを感じさせられてゐる。

濱邊には人は少かつた。もつと大勢來ればいゝのに。それでも、彼方此方にぼつり／＼と歩いたり、しゃがんだりしてゐる。ちつとも光澤のない赤い髪の毛のぼう／＼と



濱 海

した筒袖を著た女の子や、尻をまくつて膝迄波の中につけて戯れてゐる此の邊の子供らも居る。冷たさうだ。併し嬉しさうだ。平和そのものゝ圖である。

私は波打際に立止まり、又歩く。夏の波打際を歩く時と違つて、ちつとも強い荒々しい刺戟を受けない。ゆつくりと不注意に歩いてゐても、急に慌てゝ飛退くやうな激しい波は來ない。平靜な心持で悠然と歩いてゐられる。

(長興善郎の文による)

悠然
長興善郎
小説家。東京府
の人。明治二十
一年生。

三 子に送る

大震災
大正十二年の大
震災。

大震災のあつた日から最早三十三日目になる。當地の様子は、お前の居る木曾の山地へも日に日にはつきりと傳はつて行つたことだらうと思ふ。私がひどく心配したのは、お前が私達のことを案じて、上京を思ひ立ちはないかといふことであつた。震災以來、旅行の困難を聞くにつけ、お前の上京しないやうに、お前はお前でその地方にぢつとして居るやうに、私はそればかりを願つて居た。幸に私も無事、お前の弟達も無事、お前の妹も無事、それに飯倉一丁目まで延焼した大火をもまぬかれたので、その事を早くお前に知らせ、お前の上京を思ひ止まらせようと思ひながら、交通斷絶の當時、私の心は唯案じ煩ふのみであつた。

飯倉
東京市麻布區に
在り。

飢餓
キガ。

罹災者
リサイシヤ。

餘震
地震のゆりかへし。



(一) 跡の災震大

私はこの驚くべき震災と火災と、その後の出来事に就いて、狭い範囲ながら自分の見聞した事をお前に宛て、書かうと思ひ立つた。しかも、今日までそれも果し得ずに居た。住み慣れた東京の大半は、殆ど昔日の面影を失つてしまひ、飢餓は容赦なく無数の罹災者に迫つて来るばかりでなく、昨日は何十人の負傷者が町を擔がれて通つたとか、今日はまた大きな餘震がひよつとするとやつて来るかも知れないとか、さういふ混乱した空氣と惨めな光景の渦の中にあつて、實際私は何を書き得たらう。過ぐる一箇月の間、私達は一緒になつて唯々互に心配を分つの外はなかつた。私達は忍耐と

抑制

ヨクセイ。

二科會

美術團體の名稱。

プログラム
Program

抑制とを續けて漸くこゝまで出て來られたやうな氣がする。

九月一日は丁度二科會の展覽會が開かれるといふ日で、繪畫の好きなお前の弟達は、朝から上野迄出掛け、晝少し前に歸つて來た。秋の展覽會のプログラムなどをひろげて居た。お前の妹のところへは、學校友達が遊びに來てゐたし、東隣の大屋さんの女の兒も遊びに來て居た時で、あの子供らしい聲も玄關の方に聞えて居た。それほど私の家では事も無く暮して居る時であつた。

そこへ地震だ。思はず私は自分の勉強部屋からすぐ障子の外の庭へ出た。私の地震ぎらひは、お前もよく知つて居る通りだ。その私ですら、それほど大きな地震が來たとは思はなかつた證據には、自分の子供等に聲一つ掛けようとしなかつた位で、庭に居て家屋の揺れる音や物の落ちる音などを聞きながら、今に止むだ

跣足
ハダシ。

らうと考へて居た。私は奥の部屋にある火鉢を庭に移して火を
いけて居た。其のうちに激しく揺れて來た。私が急いで庭の木
戸を開けた頃は、家のものは多く跣足で
飛出して居た。

今にも落ちかゝつて來さうな家屋の
軋む音物の倒れる音、壁土の崩れる音な
どを聞きながら、一同あの青桐の下に集
つて居た時の心持は何ともいへなかつ
た。何處の家の窓から外れ落ちるとも
なく、硝子の碎ける音をも聞いた。私達
は崖でも傳ふやうに、危い石の間を渡つ
たり、崩れた土を踏んだりして、漸く植木坂の細い通りへ出られた

崖
ガケ。
植木坂
麻布區飯倉片町
に在り。



(二) 跡の災震大

のは、あの隣家の庭からであつた。

私達はその日の晝飯に卓にむかはうとして支度しかけた頃か
ら、まだものゝ二十分とは經つて居なかつたと思ふ。實に私達は
こんな大きな急激な異變の渦の中に居たのである。

稍、搖返しの鎮まるのを待つて、私達は相良さんの門前の方に移
つた。其處の櫻の木の下に薄べりを敷いて、近所の人達と一緒に
夜明しすることを覺悟した。息を切つて私のところへ駆けつけ
て來てくれた人の話によると、神田方面は盛んに燃えて居るとの
ことで、その人の下宿も焼け、宿の人達は行方も不明になつたとか。
餘りに息をはずませての話に、言ふ事もよく聞き取れなかつた。
其の人は私の顔を見るだけに満足して、一片の西瓜を私と半分づ
つ分けて食ひ、此處へ來る途中で巡査にパンを貰つたが、それを誰

薄べり
へりをつけたる
ござ。

下町
東京市の低き部分にある淺草・下谷・神田・日本橋・京橋・芝・本所・深川などの稱。山の手に對していふ。

旋風
センブウ。

にでもたゞでくれたといふ話などを残して置いて、また下町方面へ駆け出して行つた。多くの知人の家もどうなつたらう。それを思ふと私もぢつとしてゐられない氣がした。



大震災當日の雲

— あのお茶の水の女子高等師範の建築物が、僅か四分の間に燃

渦を卷いた煙で海のやうで、其の上には入道のやうな大きな層雲の形が、遠い市街を掴むかのやうに起つて居た。あれは雲か、それとも煙だらうかと私が言つた時に、お前の弟達は全部が火事の煙だと言張つた。今になつて思ふと、火焰と共に卷揚つたといふ旋風

え盡したといはれるやうな、恐ろしい旋風は、あの中に起つて居たのだらう。夕日をうけると共に、次第に上の層から色變りがして暮れて行つた。煙にしては強過ぎるほど、異様に白く光つた陰影の濃い部分も、次第に暮れて行く頃に、また驚くばかりに地が震へた。私達は、暗い葉の蔭に提灯を吊し、薄べりの上に坐つて、火事場の方のことを心配しつゝけながら握飯を食つた。

何とも知れず物の爆發する様な音が、一晚中火事場の方で、ドーン、ドーンと聞えて居た。後になつて天文臺の福見理學士に、あの音の事を探ねて見たら、あれには他の音も混つて居たらうが、多くは町々の電柱の上に装置してある油の罐のはぜた音だとの答であつた。さうとは知らなかつたものには、あの物凄い音が耳について、あれを聞いて居ただけでも、油斷のならない不安を感じた。

芝浦
東京市芝區にあ
 り。
 海嘯
ツナミ。

お前の弟の遊び友達などは、次郎と一緒になつて、互に少年らしく聞き耳を立て、あれは防火の手段として家屋を破壊するため投げる爆弾の音だらうといふものがあり、薬品の倉庫などの破裂する音だらうといふものもあつた。芝浦の方で、海嘯が来るかも知れないと言つて騒いで居るといふ噂の傳はつて來たのも、あの晩であつた。あの日の午後から夕方までに、私達の體に感じた地震だけでも百七十回餘りあつたとは、後になつて聞いた。月明りに、飯倉の電車通りへ出て見ると、下町方面から焼け出されて來る人の群が往來に續いて、それが夜明けがたまで絶えなかつた。

この異常な場合に遭遇して、私は實際に目撃したこの近所の人達の心のあらはれをお前に話したい。あの飯倉片町の電車通りから少し奥まつた處に、白煉瓦と石とを按排して造つた相良さん

蘆
ムシロ。

の邸の門は、お前の眼にもあるだらうが、あれから鳴戸鯨の裏手へかけて、幾株かある櫻の木の根もとに薄べりを敷並べ、今度の大地震を避けて居た人達の有様をお前に見せたかつた。そこには百五十人からの人が集つたらう。

私達の近所附合といふものも平素はごく冷淡で、その蘆の上へ行つて坐るまで、私は自分のすぐ隣に居る人が竹澤さんの主人とも知らなかつた。私達の家の北隣は鈴木さんで、彼處の茶の間の窓から聞えて來る赤ん坊の聲を、お前も聞いたことがあるだらう。高い石垣一つが隔てになつて、今まで私は背中合せのやうに住んで居たあの鈴木さんが、何處へ勤める人とも知らなかつた位だ。

大屋さんも、借家人も、あの薄べりの上では、まるで一家族のやうに膝を突合せて坐つた。私が南隣の杉山さんの全家族を見たの

も、それが始めての時といつていゝ。其處には子か孫かと思はれるやうな人に背負かぶさつて、避難して來て居る髯ひげの白い老人が居た。足掛七年も飯倉に住んで居て、唯の一度もこんな光景が今迄に見渡されたらうか。こんなところに隣人を見つけた、それを思ふと嬉しかつた。平素はめつたに口をきいたことも無い者が、其處では言葉を交し、握飯を分けて食ひ、また搖返しが來たと言ふ度に互に顔を見合せて、同じ胸の鼓動を覺えた。植木坂の上にある鈴木さんの病院は、地震の爲に屋根の瓦を落され、塀を倒され、おそらく此の界限での破損の一番大きかつたところだらうと言はれてゐる。あそこでは家族の人達が、みんな鎌倉の方に行つてゐたのに、年をとつた看護婦と女中と、女手ばかりで、よく主人の留守を支へた。これは一例に過ぎない。日頃勞苦の認められる事も少い

留守を支へる

灰燼
クワイジン。
被服廠
ヒフクシャウ。

湘南一帯
神奈川県の南部
一帯をいふ。
房州
千葉縣の一部。

諸方の家の奉公人が、思ひの外な勇氣を示して、その主人を助けたことの數々も、今度の震災で見逃し難いものである。

頻りにお前のことが氣にかゝつて來た。東京の大半は既に灰燼と化し、全市の死亡者は十萬乃至二十萬と數へられ、本所の被服廠だけでも三萬以上の人が死んだと言はれたばかりでなく、東京以外でも横濱全滅の報が傳へられ、震災の區域は、湘南一帯の地から房州の方にまで及んで居ることを知つた時の私達の驚きは、お前は長野または愛知方面からの新聞をひろげた時に、どんな心持でこの大震災の通信を讀んだらう。當地の様子は、どんな風にお前の地方へ傳へられたらう。

私は自分の身の周圍のことばかり書いて、その他のことはまだ何もお前に書いて送らなかつた。もつと私はこの手紙を續ける

積りで、筆を執り始めたが、お前の知つて居る通りな病後の私の健康がそれを許しさうもない。たゞ當時の僅かな身邊の報告にとどめて、一先づこの手紙を終らうと思ふ。

(島崎藤村―嵐)

天をひたす炎の波のたゞ中に血の色なせりかなしき太陽
空をやく炎のうづの上にしてしづかなる月の悲しかりけり
もだをりて親子はらから夜を明すせばき芝生に蟋蟀鳴くも
蠟燭の息づくもとに親子ゐて疲れきはまりいふ言もなし
もの皆の今しあらたに生れいでむわが東京に幸あらせ給へ

四 日 本 刀

神州正大の氣云
云
藤田東湖の正
氣歌に、「天地正
大氣、粹然鐘
神州云々」と
あるによる。

闡明
センメイ。

治國平天下
世の中をさめ
やすんずるこ
と。大學に出づ。

神州正大の氣、發しては萬朶の櫻となり、凝つては百鍊の鐵となる。實に日本刀こそは、富士と櫻の自然美を有する我が國に在つて、科學的精神的に、全世界に向つて誇示するに足る偉大なる存在である。併しながら、秋水滴るばかりに、明玉の上、一點の塵をも止めぬ日本刀の崇高さは、ひとり日本人のみが有する日本魂の力に依つてのみ鍛鍊せられるものであつて、他の外國人が、如何に發達せる科學の力を以てしても、容易に之を闡明し、鍛鍊し得られぬ一種獨特の靈器である。即ち、我が日本刀は、古來、兵器は神器なり。之を小にしては一身一家を修め、之を大にしては治國平天下の礎となる。といふ精神の下に鍛鍊せられたもので、徒に人を斬る爲に

鯨鯢
ゲイゲイ。くぢ
らのこと。
魑魅
チミ。ばけもの。

正宗

岡崎五郎入道と
號す。鎌倉時代
末期より建武に
かけての名刀匠。

九度山

和歌山縣伊都郡
にあり。

大野治長

豊臣秀吉及び秀
頼に仕ふ。元和
五年(三七七)歿。

貞宗

五郎正宗の養子。
鎌倉の刀匠。

鍛冶されたものではなく、寧ろ外敵を防ぎ、身を護る爲の器に外な
らぬのである。所謂、之を佩いて海に泛べば正に鯨鯢も伏し、之を
佩いて夜行かば魑魅も逃るといふ靈性こそ日本刀に籠る眞精神
である。然るに支那などでは、兵器は兇器なり。故に刀劍は不吉
なり。と稱し、また西洋では之を單なる殺人器視して居る。之を觀
ても日本刀の冠絶して居る所以は、そもく鍛鍊の初めからして、
其の精神を異にしてゐるのである事が知られるであらう。
名刀に絡る物語は澤山あるが、特に正宗に關するものは數へき
れぬ程ある。眞田幸村が九度山を下り、變装して大阪に投じた時、
大野治長の邸で、家臣から冷遇を受け、刀を見せよといはれたのに
對し、大は正宗、小は貞宗、共に精妙を極めた名作を示して一座を驚
倒せしめた挿話は、最も幸村の人柄を想はせるものである。

村正

後村上天皇の御
代伊勢國(三重
縣)桑名の千子
村に居たる名刀
匠。

長曾禰虎徹興里

江戸時代の名刀
匠。名刀匠貞國
の弟子。近江國
(滋賀縣)生。

大村加卜

江戸に住せし新
刀刀工。生國・系
統未詳、自ら越
後浪士と稱す。

藤源次助眞

備前國(岡山縣)
福岡の刀匠。建
長頃の人。

幸村はまた村正をも愛して、戰陣に臨む時は常にこれを佩用し
た。どういふ因縁か、村正は徳川一族に禍ひをするといふ理由で、
家康が家臣に佩用を禁じたといふのにも、多少據りどころがあつ
たかも知れぬ。この村正は、徳川氏に忌まれた代りには、幕末の志
士に好んで帶びられた。かくて慶長、元和を境として、以前の作を
古刀と呼び、以降の作を新刀と名づける。
總じて新刀は古刀に比すると、作が劣るとされてあるが、それで
も寛文、延寶頃の長曾禰虎徹興里や、大村加卜の物には、古刀を凌ぐ
名作があつた。虎徹は幕末新撰組の隊長、近藤勇が愛用したとい
ふので、近頃一層有名であるが、加卜のものは寡作の點で一層一部
に珍重された。
加卜は、藤源次助眞に私淑し、眞十五枚甲伏の鍛法を研究して、そ

出羽

出羽の國、羽前
羽後の舊稱。今
の山形・秋田の
兩縣。

水心子正秀

姓は川部氏。儀
八郎と稱す。出
羽國の刀匠。文
化六年歿。年六
十一。(二四〇九
—二四六九)

の眞髓に徹し得たと信じ、おれの打つ刀は、火神・水靈の威力によつて、鐵が生きてゐるから、活劍といふのだ。一般世上の鍛法は、皆鐵の精靈を殺してしまふから、いはゞ鐵の亡者だ。生きた人間は切れぬ」と豪語した。また、おれは武士だ。渡世でないから多くは作らぬ」と云つて、一代に僅か百振ほどしか作らなかつた。そして、どんな處から頼まれた刀でも、決して代物を受けなかつた。「價さへ貫はねば、望み手は多くても、無心をいふ者はない。氣の向いた時の外、多く作らなくとも濟む」といふのだつた。

刀劍武用論を提唱し、復古鍛法を研究大成して、新刀鍛冶の中興といはれたのは、寛政年間出羽出身の水心子正秀である。卸し鍛への復活で、この門からは細川正義・庄司直胤等の名工が現れ、その系統を引いて、別にみづから相州傳を探究し、四谷正宗と異名を呼

細川正義

下野國(栃木縣)
の刀匠。

庄司直胤

出羽國の刀匠。

山浦清麿

信濃(長野縣)の
刀匠。

ばれた、信州出身の山浦清麿あたりを、新刀最後の名匠として、聽て明治維新となつた。其の後の作は新新刀と呼ばれる。

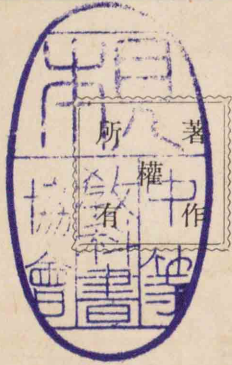
かくて三千年の誇りを持つた日本刀も、明治九年廢刀令以來、全く衰微したといふやうな説もあるが、實は之に依つて、從來單に個人として自身の爲、又は其の主の爲にのみ佩びられた日本刀が、形の上に於ては、各人の腰間から其の姿を消しはしたが、同時に精神的には國民一般の胸に藏められる處のものとなつたのであるといふ事が言へる。其の最もいゝ例としては、國民皆兵即ち一朝事ある場合は、全國民悉く此の日本刀の有する精神を魂として外敵に備ふるに至つた事を擧げる事が出来る。即ち廢刀令は、個人の刀をして、國民の刀たらしめ給へる明治大帝の思し召しに外ならぬであらうと、畏れながら拜察する。なほ、古名匠の作品で、現存す

文部省検定済

中学校國語教科用
實業學校國語教科用

昭和八年八月二十七日
昭和九年一月二十九日

昭和八年八月一日印
昭和八年八月五日發
昭和八年十二月十八日訂正再版印刷
昭和八年十二月廿一日訂正再版發行



發行所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
大阪府南區順慶町一丁目五十三番地

湯川弘文社

編輯者 佐木信綱
編者 武田祐吉
發行者 湯川松次郎
印刷者 井下精一郎

最新國文讀本(全十冊)

定價各金六拾錢

主要國字表

一ヨミ	ホ					
	うめ	うぼ	う	ほ	ふほ	ふほ
妙苗 猫	質某 眸謀	茅 袁	豐封 鳳	朋崩 封	峯逢 蜂	奉捧 乏(奥) 乏(奥)
あはび あつばれ いかるが いわし おもかげ おろし	か か か か か	か か か か か	か か か か か	か か か か か	か か か か か	か か か か か
風 鯉	倂 苧	鯉 苧	鯉 苧	鯉 苧	鯉 苧	鯉 苧
き ぎ	さ さ	さ さ	さ さ	さ さ	さ さ	さ さ
筐 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭
た う	た う	た う	た う	た う	た う	た う
鯉 梅	鯉 梅	鯉 梅	鯉 梅	鯉 梅	鯉 梅	鯉 梅
は た	は た	は た	は た	は た	は た	は た
畠 畑	畠 畑	畠 畑	畠 畑	畠 畑	畠 畑	畠 畑
ま す	ま す	ま す	ま す	ま す	ま す	ま す
榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭	榭 榭
を ど	を ど	を ど	を ど	を ど	を ど	を ど
絨 粹	絨 粹	絨 粹	絨 粹	絨 粹	絨 粹	絨 粹
一ヨミ	一	一	一	一	一	一
うよ	ふえ	う	え	うゆ	ふい	うも
膺容 鷹溶 雍雍 擁擁	葉葉 葉葉 葉葉 葉葉	杏姚 妖妖 妖妖	天幼 窈窈 耀耀	遙搖 搖搖 搖搖	熊勇 揖裕 邑雄	蒙朦 濛濛 濛濛
う	や	う	や	う	や	う
一ロ	一ヨリ	一ユリ	一	一	一	一
うろ	ふら	うより	うれ	うり	うり	うり
弄樓 陋漏 陋漏	瀧籠 籠籠 籠籠	藤蠟 蠟蠟 蠟蠟	龍菱 凌陵 稜綾	了僚 僚僚 僚僚	獵齧 齧齧 齧齧	隆龍 立笠 粒粒
う	ら	う	り	う	り	う

最新國文讀本附録

四

